出産から12ヶ月後までの親性の変化と

親性と家族機能との関連

名古屋大学大学院医学系研究科

看護学専攻

大　橋　幸　美

平成 23 年度学位申請論文

出産から 12 ヶ月後までの親性の変化と親性と家族機能との関連

名古屋大学大学院医学系研究科
看護学専攻

（指導：浅野みどり教授）

大　橋　幸　美

―目次―

Ⅰ．序論 …… 1

Ⅱ．先行研究の概要 …… 2
1.「母性・父性」から「親性」へ …… 2
2.親になるプロセスについて …… 3
3.家族機能について …… 5

Ⅲ．研究の目的と意義 …… 6
1.研究の目的（段階） …… 6
2.研究の意義 …… 6
3.博士課程における研究段階 …… 7
1）第１段階（目的１）親性の概念を明確化する …… 7
2）第２段階（目的２）育児期の親性尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討する 12
(1) 育児期の親性の構成概念を明確化する …… 12
(2) 育児期の親性の開発と信頼性・妥当性の検討 …… 13
(3) 出産直後の対象者に関する育児期の親性尺度の信頼性・妥当性の再確認 19
3)第３段階（目的３）育児期の親性尺度を用いて出産後から12ヶ月後までの親性の変化および親性と家族機能との関連を明らかにする …… 19

Ⅳ．出産から12ヶ月までの親性の変化および親性と家族機能との関連 …… 19
1.緒言 …… 19
2.研究方法 …… 21
1）調査項目 …… 21
2）調査の手続き …… 21
3）分析方法 …… 22
4）倫理的配慮 …… 22
3.結果 …… 22
1）対象者の属性 …… 22
2）育児期の親性尺度とFAIの信頼性の検討 …… 22
3）出産から12ヶ月後までの親性の経時的変化について …… 23
(1) 育児期の親性２側面・３下位領域間の関連について …… 23
(2) 育児期の親性尺度の変化 …… 23
(3) 育児期の親性に影響する要因 …… 23
4）育児期の親性と家族機能との関連 …… 24
(1) FAI総得点の変化 …… 24

(2)育児期の親性尺度と FAI との関連 24
4. 考察 24
1) 出産から 12 ヶ月後までに親性の変化について 24
2) 親性と家族機能との関連について 27
5. 研究の限界と今後の課題 28
6. 結論 29

謝辞 30

引用・参考文献 31

表 1～12

資料 1（調査関係書類：親性と家族機能についてのアンケート）
資料 2（副論文 1　別刷り）
資料 3（副論文 2　別刷り）
資料 4（投稿論文　別刷り）

Ⅰ.序論

平成22年の合計特殊出生率は、1.39[1)]と前年（1.37）よりやや高値となったものの、少子化問題は依然として日本社会の基盤にかかわる問題である。少子化の原因として、親になることへの不安・育児不安、母親の仕事と子育て両立の負担感や夫の育児の不参加等が考えられている[2)3)4)]。また、増加している子どもへの虐待についても、その背景として未成熟な親の増加と過大な育児負担による子育て不安等が挙げられ、周産期から親子にかかわりを持つ看護職による、子ども虐待の予防と早期発見・早期対応の重要性が指摘されている[5)6)]。そのためにも社会的支援だけではなく、親の気持ちに寄り添い、母親だけでなく父親を含めた家族への働きかけが重要であると考えられる。

私自身の臨床経験から、妊婦健診を夫婦が共に受け、立ち会い出産を希望・経験する父親が増えており、出産後も子どもへの関心が高く、子どものおむつ交換や沐浴など育児を積極的に行いたいと希望する父親に多く出会う。また、父親も育児経験の中で母親と同様に子どもに関する心配事や親としての責任を実感しながらも親役割と社会人という役割について不安や葛藤も持っているということも感じる。しかし現状では、看護職として母親への働きかけが主となり、父親を含めた家族への働きかけは希薄であり、家族としてのニーズに十分に対応できていないということ、それが母親に育児の負担感を多く抱かせることになるのではないかという反省もある。父親の育児参加を促すことは父親だけではなく、母親と子どもにもよい影響を与えるのではないかと考える。夫婦が協力しながら育児を積極的に行えるように、対象者の理解を深め、より具体的な家族支援を行うためにこの研究を進めていきたいと考えた。

家庭の中でも男女共同参画社会[7)]が望まれているが、女性の社会進出と核家族の増加、またひとり親家族(母子家庭だけでなく父子家庭も増加している)やステップファミリーの増加という多様化する家族形態の中で、従来の「夫は仕事、妻は家事と育児に専念するほうがよい」という性別役割分業観にとらわれない親役割認識や子どもとの関係性について考えていくことが社会的にも必要とされている。

先行研究から、親の特性や個人の親役割観の変化、子育て能力、子どもを慈しむ気持ちや能力は、男性と女性に共通するものであり子どもに接する時間や、社会とのつながり認識など個人差に還元されるところが大きいことがわかってきた[8)9)]。さらに、子どもを養育する行動や感情いずれもが、生物学的性によって生来的・固定的に決まっているのではなく、どのような立場で子どもと接するか、具体的・日常的な世話役割をするか否かによって規定されるということが明らかにされている。つまり親の役割意識や感情の差については、子ども

との接触時間の違いなどの条件分析的研究として注目されている[10]。子どもの成長と発達に応じて、男女を問わず親も発達していくという生涯発達するひとりの人間としてとらえることの重要性[11]も指摘されている。より具体的な看護支援を考えていく上で、親になるプロセスを理解するためには、親としての特性をまず把握する必要がある。親としての特性をあらわす用語として従来では、「母性・父性」が用いられてきたが、これは性別役割分業観に基づいており本研究の母親と父親という性役割にとらわれないという考えとは整合性に欠けている。近年「母性・父性」に代わって「親性」という言葉が用いられ始めてきたが、その概念は不明確であり社会的認識も低い。そこで、母親と父親に共通する親の特性を示す「親性」に着目し出産後からの親性の変化を親になるプロセスとして考えることにした。

初めての子どもが生まれた後、夫婦の生活は一変し家族としても大きな変化を強いられる。つまり、親役割を受容するプロセスと並行して家族内のシステムの変更や調整も必要となる。親になるプロセスの理解を深めるとともに家族との関係性をも把握することは看護支援の方向性を導き出すためにも重要である。

我が国においては、母親の育児不安や児に対する愛着、母親の意識といった母親を対象とした縦断的調査は行われているが[12][13][14]、父親をも対象とし、その変化と家族機能との関連性についてはまだ充分に明らかにされていない。乳幼児期の子育てに最も深くかかわりを持つ看護職者にとって、親になるプロセスと、家族機能との関連を把握することは対象理解を深め新たな看護を創出することになると考える。

Ⅱ.先行研究の概要

1.「母性・父性」から「親性」へ

これまで「母性」や「父性」は、生物学的性差や性別役割分業観を基盤とした特性と考えられてきた。広辞苑によると「母性」とは、女性が母としてもっている性質。また母たるもの。「父性」とは、父として持つ性質[15]、とのみ表現されている。Deutschは、「母性」を社会学的・生物学的感情統一としての母の子に対する関係を示すものである[16]と定義しているが「父性」に関しては、広辞苑以外は明確な定義はされておらず、「母性」との対比における対立的二元論で語られるか、権威とか権力あるいは規範性といった父権的社会における家長のイメージを引きずって考えられることが多かった。歴史的に見て、戦前の我が国の社会では家庭における性役割分業がはっきりした形で確立されており、伝統的に男性・女性はそれぞれの性に属する役割を規定しそれを当然のことと

してその役割を遂行してきた。つまり、男は仕事、女は家庭という考え方が多くの人によって支持されてきた[17]。しかし、核家族化の増加と、女性の社会進出が進む現代社会においては男女共同参画社会の実現が望まれており、ひとり親やステップファミリーの増加による多種多様な家族形態から家庭においても、伝統的性別役割分業にとらわれない人間の生き方や子育てを考える必要が訴えられている。また、親の特性や個人の親役割観の変化、子育て能力の研究が進むにつれ、子どもを慈しむ気持ちや能力は、男性と女性に共通するものであり個人差に還元されるところが大きいことがわかってきた[8]。さらに、子どもを養育する行動や感情いずれもが、生物学的性によって生来的・固定的に決まっているのもではなく、どのような立場で子どもと接するか、具体的・日常的な世話役割をするか否かによって規定されるということが明らかにされ、母親と父親の役割意識や感情の差については、その条件分析的研究として注目されている[10]。

現在、社会的にも親への支援の基盤的考えとして性別役割分業観にとらわれない用語が求められ、実際に男性にも女性にも共通する親としての役割観や子どもへの感情を表すものとして「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」の新しい用語が用いられている。しかし、それぞれが様々な学問分野で対象者と時期が限定され概念が不明瞭なものもあり、実際社会での共通認識度は低いと考えられる[18]。そこで、生涯発達する親の特性を考慮し、歴史的にも最も古くなおかつ社会的認知が得られやすいと考える「親性」についてその概念を明らかにすることを本研究の第1段階とする。

2. 親になるプロセスについて

親になるプロセスや親としての発達について、先行研究では、生涯発達論の視点で親がどのように認識しているのかについて以下のことが明らかにされている。

親となり子どもを育てることは、発達理論においても成人期の発達課題である。Havighurstは、生物学的基準、文化的基準、心理学的基準に基づいて、発達課題理論を説いており、その中でも成人前期における発達課題として、結婚した相手と一緒に生活していくことを学び、家庭を形成し、子どもを育て、家庭を管理すること[19]と述べている。Eriksonは、ライフサイクル理論において発達的危機に注目し、成人期の課題は、親密性と世代性の獲得である[20]、と述べており、親役割を遂行するだけでなく、親であるという新しい自分やアイデンティティを受け入れる人格的発達を含んでいると指摘している。

柏木らは、親としての成長として、「柔軟さ、自己抑制、運命・信仰・伝統の

受容、視野の広がり、生き甲斐、存在感、自己の強さ」の６領域の項目[21]を挙げている。これらの研究内容から、研究者らが提示する親性も妊娠・出産・育児を通じて変化していくと考える。

Rubinは、Maternal identityを獲得するための母性行動の適応について、母親に焦点をあて、①受容期 taking in phase　妊娠期に続く母親役割習得過程で、受身的であり依存度が高く傷つきやすい。②保持期 taking hold phase　保持期は約10日間続く③解放期 letting go phase　受容期、保持期を経て母親自身が以前の新生児のいなかった妻役割だけの自分からの別離ができ、次に新生児と身体的に分離したことを認め、受け入れることが、この時期の発達課題となる、と３段階の適応段階を分けて述べている[22]。Mercerは、母親役割獲得に影響を与える要因として、①母親の年齢②出産経験のとらえ方③早期の母子分離④社会的ストレス⑤ソーシャルサポート⑥自己概念・性格特性⑦健康状態⑧子育ての態度⑨児の気質⑩乳児の健康状態を[23]挙げている。

父親については、出産後の父性の発達と父親役割獲得理論としてMartin Greenbergは、父子間の心の絆の形成は、母子間の場合とほとんど相違はないと述べており、母子の『相互作用』に対して、出生直後の子どもとの関わりには、のめり込み(engrossment)という概念で説明している。この没入感情には、①赤ちゃんに対する強い視覚的意識②赤ちゃんに対する触れたいという強い感情③自分の赤ちゃんは他人の赤ちゃんと比べてはっきり違って見える④赤ちゃんは全く申し分なく見える⑤父親はわが子に対して強い魅力を感じ、注意を集中させる⑥父親は気分が高揚して浮き浮きとする⑦父親は自尊心の高まりを感じる[24]、という７つの特徴を挙げている。

妊娠・出産・育児期における自己実現と父親・母親役割の葛藤について、自分自身の存在価値の確認に際し、時として父親・母親役割として社会から要請されるものと対立し、強い葛藤として経験することがあり、育児不安についても親役割と個人役割の理解が重要であると指摘している[25][26][27]。このことは、自己認識の中でも、親役割の認識と親役割以外の認識が存在し、育児期においてそれらの調和と葛藤に着目する必要があるということを示唆している。

また、ライフサイクルや学歴によって「自分の生き方」と「家族の関係性」の資源のバランスが、育児葛藤に結びついているとの報告もある[4]。

これらの報告から、生涯発達する親としてそのプロセスにおいて、妊娠・出産・育児期は大変重要な時期であり、母親だけではなく父親自身も親になるプロセスを踏んでいること、また、さまざまな影響要因が関連していることが理解できる。しかし、出産後における親としての発達を親役割認識と親役割以外の認識と子どもへの認識という多側面からとらえている研究は少ない。本研究では

親になるプロセスを親性の発達という視点から捉え親役割の認識だけではなく社会とのつながりやひとりの人間としての満足感など親役割以外の自己認識と子どもへの認識という多側面から考えていく。

3.家族機能について

家族機能とは、個人、家族、社会システム、社会との関係において家族が果たしている目的である。子どもの誕生は、家族にとって大きな出来事であり、家族発達上の課題を提起する。Duvallは育児期の家族の発達課題として、子どもの世話と養育に対する責任をお互いに負うこと、家族メンバーの役割学習を促進すること(母親役割、父親役割を促進すること)、新生児や幼児を受け入れ、家族内のコミュニケーションパターンの変化に適応すること、世代間のパターンを再編成すること(祖父 母と孫のサブシステムの確立)、家族メンバーの動機つけと意欲を維持すること、家族の慣習と日課を確立すること[28)]を挙げている。つまり、初めての子どもが生まれることによりその構造の変化に伴い家族の機能も変化すると考えられている。このことから、出産後の家族機能に着目することは、重要であると考える。

家族システム理論では、家族を「諸要素の総和以上」の関係としてとらえ、諸要素間の相互作用（相互連結）は家族機能の変化としてとらえている[29)]。つまりアセスメントや介入の焦点が家族メンバーの相互作用にあてられている。家族は、全体が部分の総和よりも大きいという点と相互作用システムとしてとらえられるということは本研究の親としての個人と家族関係との関わりという視点への意義へと結びつく内容である。

Wright&Leaheyらは、家族員一人の変化は家族全体に影響を与え、家族は変化と安定の間にバランスを創造することができる[30)]と述べている。子どもを産み育て社会化する機能は、妊娠・出産期の家族にとって特に重要な機能である。この機能に関連するものとして、妊娠・出産期の家族の看護にも重要となる感情表出、家族コーピング、ヘルスケア、経済的サポートや基本的ニーズの充足があげられる。

本研究では、出産後の育児期の親としての発達と親性と家族機能がどのように関連するのか明らかにするために、特に夫婦間のコミュニケーションと家庭内の役割分担の調整と初めての子どもが生まれたことによる家族の絆への認識という点に着目したいと考えた。そのために、家族機能をどのようにとらえるかについて育児期と家族機能について先行研究を調べた。西出は、家族システム機能を測定することを目的に家族アセスメントインベントリー（Family Assessment Inventory：FAI）という尺度を開発し、その信頼性と妥当性が確認

されている。下位領域は、家族のコミュニケーション・家族システムの柔軟性・家族内ルール・家族に対する評価・家族の凝集性の５領域である[31]。これは、日本の家族を対象として家族成員の問題や家族のシステム機能をとらえることができる尺度である。

育児と家族機能(FAI)との関連性について、古田は１歳半の双子をもつ母親の愛情の偏りと家族機能とは関連があると示しており[32]、数井らは、育児ストレスの親ストレスは、コミュニケーション、凝集性、家族に対する評価とは負の関連が柔軟性とは正の相関がみられた[33]と報告している。これらのことからも、育児期における親の心理的状態と家族機能とは関連があると示唆され、育児期の親性と家族機能とは関連性があるのではと予測できる。

Ⅲ.研究の目的と意義

1. 研究の目的（段階）

1)親性の概念を明確化する

2)育児期の親性尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討する

3)育児期の親性尺度を用いて、出産から 12 ヶ月後までの親性の変化および親性と家族機能との関連を明らかにする

2. 研究の意義

本研究において、「夫は仕事、妻は家事と育児に専念するほうがいい」という性別役割分業観に基づく「母性・父性」をふまえ、母親と父親に共通する「親性」に着目することは、今まで育児の担い手として焦点があてられてきた母親だけではなく父親自身親役割の受容と育児についてどのように認識しているのかについて理解を深めることができる。親が妊娠・出産・育児を通して親役割を受容し子どもとの関わりの中で様々な思いをもちながらも親として発達していくというプロセスを把握することで、母親だけではなく父親を含めた家族に対する看護支援について適切な時期と具体的内容を示唆することができる。また、親性の変化と家族機能との関連を明らかにすることにより、個人だけではなく家族の関係性に関わることが個人と家族の発達を促すということの重要性を確認することができ、家族機能への関わりについてその方向性を提示することができると考える。

3.博士課程における研究段階

1)第1段階（目的1）親性の概念を明確化する（副論文1）

親としての特性を示す用語として、「母性・父性」が用いられてきたが、これらは家長制度を中心とする歴史的背景をもち、「夫は仕事、妻は家事と育児に専念する方がよい」という性役割分業に基づいて考えられてきた概念である。近年、それらに変わる女性にも男性にも共通する親としての役割観や児への感情を表すものとして「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」という新しい用語が使われている。しかしそれぞれ共通した意味を含みつつも、各学問領域で用いられており対象者が育児期の親に限定されているなどと、概念が不明瞭な点も多く社会での認識度は低い。親支援の中心的専門職としての看護分野から「親性」という用語の新たな概念提示を試みた。

親性概念の視点として、(1)人間としての基本的欲求（養護性）があり、すべての人がもっている (2)女性と男性に共通するものである (3)自己に対するものと、子どもに対するものとの2方向性でとらえる (4)ライフステージとともに発達していくものである。という4点を挙げた。(1)については、Murrayが、人間の欲求として、養護欲求が存在することを明らかにし、①感情、情緒：憐憫、同情、情け、やさしさ②性格特性と態度：養育的、同情的、憐れみ深い、優しい、母らしい、保護的、援助的、父らしい(温情的)めぐみ深い、博愛的、甘い、情けある、慈善的、やさしい、寛大な、とがめだてしない、寛容③行為：不幸なもの、悲しみにあるものに特に気をくばること、子どもや動物と一緒になって愉しむこと、哀れみの情をおこすこと、時間や精力や金を気前よく使う、ある者が弱さを示すといっそう愛着を感ずること、涙で心を動かされること[34]、という特徴を述べている。このことから、基本欲求としての養護欲求をもつ人間としてすべての人がもっているものであるという事が考えられる。そして、(2)については、1980年代以降、母親だけではなく、父親を対象とする研究が数多く行われていて、子どもへの感情や親役割については、女性・男性という生物学的性別を問わず誰でも持っている特性であるということが明らかにされている。(3)については、RubinとWalkerらがMaternal identityについて、自分自身の概念と子どもに対する概念という視点からとらえ[22][35]、父親については、Grossmanらが、父親になる男性にとって、親として子どもを育てるには、子どもをかわいいと感じ、子どもに対して慈しみや思いやりの気持ちを持つ親和性(Affiliation)が豊かであると同時に決断力や自己主張、精神的経済的独立意識といった自律性(Autonomy)も不可欠であると述べており[36]つまり親としての認識は子どもへの一方的なものではなく自分の感情、思考、信念などをどのように認知しているかの自己への方向性を含む2方向性としてとらえていく

ことが重要である。(4)については、人間は生涯発達するという過程の中で、妊娠・出産・育児期以降では親としての役割を獲得して成長するということ、また、養育を必要とする子どもの親だけではなく、高齢者となった親、将来親となる人や、不妊問題を抱える人、片親家族の人等、様々なライフサイクル、ライフステージにある人をも対象とするものであるべきだと考える。

そこで、本研究における親性の概念を、上記に挙げた(1)人間としての基本的欲求（養護性）があり、すべての人がもっている(2)女性と男性に共通するものである(3)自己に対するものと、子どもに対するものとの2方向性でとらえる(4)ライフステージとともに発達していくものである、という4つの視点に着目して、文献検索を行い親性の概念の定義を行った。

検索については、親と子育てに関連し、性別役割分業観にとらわれないという共通した意味をもつ「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」をキーワードにCiNii(国立情報学研究所論文情報ナビゲータNII Scholarly and Academic Information Navigator)と医学中央雑誌（以下、医中誌）を用いて検索を行った。それ以外にも著者らが、育児に関わる学問分野の書籍から先に挙げたキーワードについて記載されている文献を追加することにした。

CiNiiと医中誌による検索結果は「親性」の結果は、CiNii97件・医中誌25件、「育児性」は、CiNii 12件・医中誌10件、「養育性」は、CiNii 8件・医中誌4件、「養護性」は、CiNii 38件・医中誌8件、「親(性)準備性」は、CiNii 27件・医中誌17件、「次世代育成力」は、CiNii 28件・医中誌9件であった。遺伝学用語として用いられている「親性」の文献と、抄録と会議録、他の用語との重複文献を削除した。さらに、CiNiiと医中誌の検索からは検出されなかったが、上記のキーワードについてその概念が記載されていた書籍を著者らが何冊か追加した。その結果、表1に示すように、用語では「親性」が31件と最も多く取りあげられていた。次いで「養護性」が25件であった。多領域の学問分野で子育てに関わる新しい用語として「親性」に着目していることが分かった。学問分野別に見ると、看護領域では、「親性」が11件で最も多く取りあげられ、次いで「育児性」が7件であった。特に看護学領域では、妊娠・出産・育児期の親に密接に関わることから「親性」に強い関心を持っていると考えられる。**(表1)**

「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」の用語について、文献検索結果を表2に提示した。概念提唱者と年代と文献の種類、各用語の意味と研究者らが考える「親性」概念の視点との共通点について表2に示した。本稿では特に概念が提示されている文献に焦点をあてたため、書籍が多く含まれることとなった。**(表2)**

「親性」について

歴史的にもっとも古くから使われている用語である。概念の変遷についてみると、与謝野晶子[37]は、1921年にはじめて「親性」という言葉を用い『形と作用において父と母に分かれていても、親としての精神は男女同一であって、等しく人間性の表現ですから、両者を統一した「人間性表現」もしくは「人間的活動」という言葉を持って称すべきものと思います。教育の進歩に由って、唯だ益々それが動物的の親性から、人間的の親性へ醇化されていくばかりです。』と述べている。また汐見は、1989年に『「父親らしさ」「母親らしさ」を強調するよりは、父親も母親も区別なく、親であることとその立場を自覚し、その役割を正しく遂行することを強調することが、より積極的な意味を持ちうるのではないか[38]』という考えのもと、「父性」「母性」にかわる「親性」という用語を提唱し、1997年には、「子どもの基本欲求を上手に満たしてやる愛情、態度、能力が含まれているだけでなく、夫婦でそれをうまく分担する能力も含まれていると考えてよい[39]。」と述べている。

糸魚川は、「生物的な性にとらわれない親としての一般的な性質をいう。」とその概念提示をし、さらに、親性の回帰とは、人類の成人が生物的な性に拘束されていても、その拘束にとらわれずに両性の行動と役割を担うべき本来的な方向性をいう。また、親性のひとつの要件は繁殖活動であろうが、親性は実子の保育、保護に限らず、弱い立場の仲間にたいする保護、攻撃抑制、受容、理解を基盤とすべきである[40]。」と述べている。さらに、「親は、単に子育てを担う存在だけでなく、同時に一人の女性・男性としての関心や達成への意欲、動機も持っており、個人としての発達も生涯発達という視点から見ていく必要がある。」とも述べている。

谷向は、『「親性」とは、親として育ちゆく命である子どもを慈しみ育もうとする心性であり、性別や年齢に関係なく、また子の親であるかどうかに限らず誰もが持つ特性であり、その豊かさは個人差によるということである。親になることは人に大きな変化をもたらす。だれもが親になったときは初心者で未熟だが、子どもを育てる経験を通して徐々に親らしさを身につけていくものである。しかし、親性の発達は親になって始まるものではない。親になる前から、さらに子どもが一人前になった後も続く。人間は発生から死に至るまで発達し続けるというのが生涯発達の考えであるが、親性の発達も生涯にわたり続くものなのである[41]。』と述べている。

林も、親の発達を発達段階的に捉えること、生涯発達の観点から捉えることの必要性を強調し、ジェンダーフリーの概念としての親性について、「親が、自分の子どもを養い育てようとする性質として定義される[42][43]。」と述べている。

「育児性」について

大日向が従来の母性・父性に代わる性差を超えて子どもを育むという視点を大切にする概念として「育児性」を提唱しており、「育児が性役割分担や父性・母性にかかわる既成の価値にとらわれることなく、各自の個性と相手の人格とを尊重した男女（夫婦）関係のもとで、新しい家族の誕生を迎えることが望ましい[44)45)]。」と述べている。

鮫島は、「親性」と「育児性」を区別して考えており、『「親性」は、生物学的性差を認めた上で、両性ともに、親となることによる発達する個人の人格的特性。「育児性」は、生物的性差を問わず、個人の育児能力を統合するもの。そして、親から子どもへ方向性のある概念[46)]。』と規定している。

「養育性」について

松岡は、『子どもに対する養育行動や養育態度などは母親と父親に共通の概念としてとらえており、「他者への共感的理解」という、親になる以前に形成される対人関係の基本的な能力を基礎として、妊娠・分娩・育児の経験を通じて発達する[47)]』と述べている。

「養護性」について

小嶋は、『動詞“nurturance”には、発達途上にある対象に、栄養・支援・励ましなどを与えることを通じて、その発達を促進させるという意味がある。そのような行動・構えのそこに慈しみ育む心と技能があるという考えで「養護性」と表現している。発展途上にある対象として、代表的には子どもが考えられているが、障害をもつ人や老人、さらには一時的にその有能性を失っている状態にある人々(疲れている大人、落胆して元気を失った人など)や、動植物も含められる。そして養護性は、養育者としての成人だけがもつのではなくて、幼児期からそれを発達させていくものと考えられる[48)49)]。』と述べている。

養護性を育む要因として、小嶋は、「年齢、性別、子ども時代の母親との間に形成された愛着関係(兄弟・仲間関係などの)対人関係、性別役割観（幼い子ども、老人、病人、障害をもつ人々、動植物との接触経験などの）養護経験など」を挙げている。

「親(性)準備性」について

岩田と井上らが、『「親準備性」とは、望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期（青年期）における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態を意味している[50)51)]。』と定義している。そして、「具体的には、望ましい結婚生活と育児行動を成立・維持させるような、異性観、結婚観、性役割観にはじまり、子どもの受け入れに関わる態度（親としてのアイデンティテイの準備状態)、健康な子ども親や育児知識や技能の習得度など、多くの領域から構成

される」と述べている。

井上らはさらに、「親準備性の形成に影響を与える要因として、①両親から愛されたという記憶で占められている子ども時代②心理的安定感のある家庭で育った体験③親が同一化の対象たり得ていること④健康な異性への関心と対異性行動の存在⑤安定した性役割感と性役割の受容[52]」を挙げている。井上らは、その研究の中で、若い世代に健康な親行動を育み出そうとするなら、まずその親たちが子どもにとって安定した暖かい家庭を築き、その中で十分な子育てをしていくことの重要性を示唆している。

「次世代育成力」について

原は、種としてのヒトが各社会単位ないしは、種全体として次世代を育てていく能力確保という意味で、次世代育成力[53]という用語を提言している。そして、『「男性による」とか「女性による」という対立を超えて、人々が共に考え、共に尊重し合いながら、次世代へものごとを引き継ついでいくという願いがこめられていて、家族を超えた人と人との絆の中で子どもが育つという現象も含まれる。世代から世代への継承に際して、男であるか女であるかが状況への参加に対する決定的分かれ目になるといったことのない社会を構築しつつ、ヒトが一人ひとり自らの心とからだを大切にしていきたいとの願いをこめたい。』と述べている。

考察

「親性」の概念については、与謝野晶子がすでに 1921 年には、親としての精神は同一であるという観点から人間性の表現と述べている事は非常に興味深い。また、汐見と糸魚川は、親であることとその立場の理解という親役割観の認識の重要性を述べていることは、親としての理解を深める上で重要なキーワードになると考える。谷向は、「親性」を、親として子どもに対して慈しみ育もうとする特性としてとらえていることと、性別や年齢に関係なく、子の親であるかどうかに限らないとする点は、現在の多様化する家族形態や育児支援の現状を考えると理解しやすい。「親性」の概念の構成要素として親役割観だけではなく、子どもへの感情や認識も考えていく必要があるという点は著者らが考える親性概念の 3)の視点と共通する。さらに、谷向と林が述べているように、親をひとりの人間としてとらえ、親を生涯発達の観点から捉え、人間の能力の一方向の進歩・向上・獲得を示す変化だけではなく、親としての成長は、停滞や退歩も含みながら変化していく発達として捉えていくことが重要であるという点は著者らが考える親性概念の(4)の視点と共通する。

「育児性」の概念については、大日向の性差を超えて子どもを育む視点という考えは、汐見や糸魚川、谷向らの「親性」の概念提示と共通する内容である

が、その用語のとおり、育児期に焦点があてられたものであり、育児期以降の親としての特性を含むことに限界がある。研究者らが提唱する親性という用語は、子どもの年齢に制限されない親の特性を捉えることができると考える。

「養育性」「養護性」の概念については、養育、養護する対象者に対する共感性と理解に焦点があてられており、妊娠・出産・育児の経験を通じて発達するという特性について述べている事は他の用語の概念に追随し、著者らが考える親性概念の(4)の視点とも共通する。また、養護性については、誰でももっているものであり、対象となる人は、子どもだけではないという点は、人間の基本的欲求を根底とする考えであり著者が考える親性概念の(1)の視点と共通すると考える。

「親(性)準備性」の概念については、青年期を対象者として、親役割獲得以前の価値観や心理・行動・知識的側面の準備状態について述べられているが、これは「養護性」の誰にでももっている特性と共通するものである。

「次世代育成力」の概念については、次世代の育成について、個人や家族の特性と責任に頼るのではなく、社会全体の能力としての捉え方が特徴となる。これは、Erikson が提唱する「生成世代性(generativity)」[20]の概念にも共通する内容であると考える。つまり個人の自我を超える世代間の連関をも問題にしているということである。この用語は社会的支援に関わる世代のつながりに着目しており、個人の成長・発達としての特性を表す他の用語とは焦点とするレベルが異なると考える。

以上の文献検索をふまえ、親性の概念を、「親性とは、すべての人がもっているものであり、女性と男性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、他者(子ども)に対しても慈しみやいたわりをもつという性質である。ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮される。」と定義した。父親は、妊娠・出産を直接的に体験するわけではないが、妊娠期・出産期・育児期の全期を通じて妻と子どもをいたわり、子どもの保護と育成についても親としての役割を担い、その能力を十分発揮できると考えた。

2) 第 2 段階（目的 2）:育児期の親性尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討する(副論文 2)

(1)育児期の親性の構成概念を明確化する

「親性」の概念をふまえ、育児期という限定した期間における親の特性を把握するための、尺度開発に着手した。その理由として、育児期の親を自己への認識と子どもに対する認識の 2 方向としてとらえ、さらに親役割の自己認識と

親役割以外の自己認識から測定する尺度がなく、親としての特性を多側面から捉えることは具体的な育児支援につながるからである。

本研究において、育児期に焦点をあてた理由は、出産後初めて子どもを目の前にした母親と父親は、親になることの喜びと期待とともに大きな不安を持っており、役割受容過程に関わる看護職は大変重要な使命を持っている。つまり妊娠・出産・育児期に密接に関わりを持つ看護職の影響力は非常に大きく、親になるプロセスの認識を深めることが具体的支援方法の創出につながると考える。

先に述べたように、Erikson は、親となり子どもを育てることは成人期の発達課題とし、育児期とは、親役割獲得期間であり家族発達においても家族システムと家事や仕事の役割の再調整時期でもあると述べている[20]。この時期への関わりは親と子どもの個人の成長をうながし家族の関係性に大きな影響を与えると考える。そこで、育児期の親性の構成概念については、前述したように母親について Rubin と Walker らが Maternity identity について、自己への概念と子どもへの概念という 2 方向からとらえ[22)35]、父親については、Grossman らが、父親になる男性にとって、親として子どもを育てるには、子どもをかわいいと感じ、子どもに対して慈しみや思いやりの気持ちを持つ親和性(Affiliation)が豊かであると同時に決断力や自己主張、精神的経済的独立意識といった自律性(Autonomy)も不可欠であると述べており[36]母親も父親も自己への概念と子どもへの概念という 2 方向性で考えることは矛盾していない。自己への概念については山崎と小野寺が、親役割の認識と親役割以外の自己が存在し調和と葛藤があると述べており[55)56]、これも母親だけではなく父親にも共通する内容であると考える。

これらのことから、親役割獲得過程である育児期の親性を自己への認識と子どもへの認識という 2 側面で捉え、さらに自己への認識を、「親役割の状態」と「親役割以外の状態」と分け、親役割の獲得過程について考えていくこととし、「子どもへの認識」を含めた 3 つを下位領域とした。

(2)育児期の親性尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

親役割獲得過程である育児期の親性の自己への認識について、「親役割の状態」と「親役割以外の状態」というサブカテゴリーに分け、「子どもへの認識」を含めた 3 領域を構成概念とした。育児期の親性について、5 段階評定法、71 項目の質問項目の尺度原案を作成し、小児看護と母性看護の研究者 19 名が親性の概念についての内容評価を行った。さらに 0 歳児～6 歳児の母親と父親 11 組に対してプレテストを実施し、内容妥当性と表面妥当性について検討を行った。

結果 2 項目を削除・7 項目を修正し「育児期の親性尺度（試作案 69 項目)」を作成した。69 項目について因子分析を行い信頼性と妥当性の検討に向けての調査を行った。

調査対象：育児期の母親と父親 1000 組 2000 名

調査協力機関：中核市である A 市の保育所・幼稚園・総合子育て支援センターの計 8 ヶ所

調査期間：平成 19 年 3 月～5 月

調査内容：属性、養育体験、子育て観、「育児期の親性尺度（試作案 69 項目）」基準関連妥当性の検討のために「母性意識尺度（大日向）」[65]を用いることにした。

回収方法：各研究協力機関で同意を得られた後、各施設において調査用紙を配布し、留め置き調査法とした。

回収状況：回収数 935 名（母親 526 名、父親 409 名）回収率 46.8%、全項目すべての回答が得られた 859 名(母親 484 名、父親 375 名)　有効回答率 91.9%を調査対象とした。

倫理的配慮：平成 19 年 3 月に名古屋大学医学部倫理審査委員会の承認を受けた。本研究の参加は自由意志に基づくものであり、研究に参加しなくても何の不利益を生じないことも含め、研究の目的・内容・方法について文章で説明する。調査用紙の回答と投函をもって同意とみなす。無記名でよいことを明記し、母親と父親のプライバシー保護のため個別の封筒を用意した。

結果

対象者の属性

回収数は 935 名(母親 526 名、父親 409 名)回収率 46.8%のうち全項目についてすべての回答が得られた 859 名(母親 484 名、父親 375 名)有効回答率 91.9%を分析対象とした。対象者の概要は表 1 に示す。子どもの年齢は、5 歳以上(18.1%)、4 歳(20.8%)、3 歳(21.2%)、2 歳(11.9%)、1 歳(16.5%)、0 歳(10.4%)と調査機関を主に幼稚園と保育園としたため 3 歳以上が 2 歳以下に比べ多くなったが、末子を対象としたため 2 歳以下も約 40%を占めていた。**(表 3)**

信頼性・妥当性の検討

① 項目分析による質問項目の選定

育児期の親性尺度試作版 69 項目全体のα係数は 0.96 であった。69 項目が 1 つずつ除かれた場合のα係数も 0.96 であった。そのうち尺度全体のα係数より大きく、全体の内的整合性を脅かす可能性の高い項目、および集計結果で平均値と標準偏差に大きな偏りが見られた項目(天井項目・フロア効果)、I-T 0.30 相関未満の項目から、「私は、子どもをかわいいと思います」「私は、子どもを大

事に思っています」等の主に子どもへの愛情サブカテゴリーを含む 9 項目を削除した。残り 60 項目に対し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、初期の固有値と育児期の親性を 3 領域でとらえるという仮説等を基準にして 3 つの因子を抽出した。この時点での累積寄与率は 40.1%と低く因子負荷量の低い項目が認められたので、再度の因子分析により項目の検討が必要となった。その結果因子負荷量が 0.40 未満の項目で、「親役割の状態」項目である「私は、親としての自分に満足しています」「私は、親としての自分が好きです」「私は、親として成長していると思います」、「親役割以外の状態」項目の「私は、親として以外の自分について考える事があります」「私は、自分なりの価値観を持っています」「私は、平均寿命ぐらいまでは長生きしたいと思います」、「子どもへの認識」項目の「私は、子どもを信頼しています」「私は、子どもが何をして欲しいのかわかりません」を含む 23 項目が削除された。複数の因子の負荷量が高かった 7 項目のうち、研究者らの話し合いにより、「私は、子どもとコミュニケーションがとれています」「私は、子どもに喜びを与えていると思います」「私は、子どもに信頼されていると思います」については、親役割の認識と子どもとの相互関係を評価するうえで重要な項目と考え、残すことにした。33 項目(逆転 14 項目)が選定され、累積寄与率は 48.3%に上昇した **(表 4)**。

抽出された因子について、研究者らが作成した質問項目の領域名と照らし合わせてみると、第 1 因子は「親役割の状態」、第 2 因子は「子どもに対する認識」、第 3 因子は、「親役割以外の状態」とほぼ一致した。しかし、「子どもへの認識」と想定していた「私は、子どもとの関係に満足していません」「私は、子どもとスキンシップがとれていません」「私は、子どもによく話しかけています」等の子どもとの関係を示す 5 項目については、「親役割の状態」に含まれる結果となった。さらに、「親役割の状態」に想定していた、「私は、子どもの食事（授乳）の世話がうまくできます」「私は、子どもを寝かしつける事がうまくできます」という育児の能力を示す 2 項目は、「子どもへの認識」に含まれた。「私は、親としての自分のイメージ通りに出来ていると思います」「私は、親として成長していると思います」という親役割獲得の期待として挙げていた 4 項目はすべて削除された。以上のことから育児期の親性尺度を「親役割の状態」13 項目（サブカテゴリー：親役割の満足感、育児への関心・態度、子どもとの関係）「親役割以外の状態」9 項目（親として以外の自分への満足感、自己肯定・自己満足感、社会との関係)、「子どもへの認識」11 項目(子どもへの愛情、子どもの様子の理解、子どもの成長発達の理解、育児能力)の合計 33 項目とした。**(表 5)**

② 信頼性係数と基準関連妥当性の検討

33 項目からなる育児期の親性尺度の総得点は 73 点から 165 点の範囲にあり、平均は 123.6（SD15.5）点であった。各下位領域については、「親役割の状態」得点は平均 51.2（SD7.1）点、「親役割以外の状態」得点は平均 31.1(SD5.8)点、「子どもへの認識」得点は平均 41.3（SD5.5）点であった。Kolmogorov-Smirnov の正規性検定の結果、総得点は正規分布であることを示した。(Z=1.33,p=0.06)

育児期の親性尺度の信頼性分析の結果、α係数は、33 項目全体で 0.94 であった。下位領域では、「親役割の状態」13 項目は 0.90、「親役割以外の状態」9 項目は 0.87、「子どもへの認識」11 項目は 0.87 であり、育児期の親性尺度の高い内的一貫性が確認できた。さらに母性意識尺度についても、12 項目で 0.84、MP(肯定)6 項目は 0.84、MN(否定)6 項目は 0.72 と十分な信頼性が確認できた。

再テスト法では、約 1 ヶ月間隔で実施された 1 回目、2 回目ともに有効回答が得られた母親(11 名)と父親(11 名)のデータを用いた。各領域の相関関係は、育児期の親性尺度(33 項目)全体では rs=0.68(p<0.01)、「親役割の状態」は rs=0.85(p<0.01)、「親役割以外の状態」は rs=0.66(p<0.01)、「子どもに対する認識」は rs=0.78(p<0.05)であった。「親役割の状態」と「子どもへの認識」は高い安定性を示していたが、育児期の親性尺度全体と「親役割以外の状態」ではやや低い値を示していた。これは、対象者が少なかったことと、育児期の親の心理状態は日常生活の様々な要因から変化しやすいからではないかと考えられる。

育児期の親性尺度と母性意識尺度との基準関連妥当性を検討した。育児期の親性尺度総得点と「MP 項目」との相関関係をみていくと rs=0.61(p<0.01)で中程度の正の相関が、「MN 項目」とは rs=-0.48(p<0.01)で中程度の負の相関がみられた。さらに詳しく各領域との関連についてみると、「親役割の状態」と「MP 項目」との相関関係は rs=0.63(p<0.01)で中程度の正の相関が、「MN 項目」とは rs=-0.46(p<0.01)で中程度の負の相関がみられた。「親役割以外の状態」と「MP 項目」との相関関係は rs=0.45(p<0.01)で中程度の正の相関が、「MN 項目」とは rs=-0.53(p<0.01)で中程度の負の相関がみられた。「子どもへの認識」と「MP 項目」との相関関係は rs=0.44(p<0.01)で中程度の正の相関が、「子どもへの認識」と「MN 項目」は rs=-0.22(p<0.01)で弱い負の相関がみられた。これらのことから育児期の親性尺度と母性意識尺度の肯定項目とは正の相関があり、否定項目とは負の相関があり関連性を示していた。母性意識尺度は、親役割の受容について測定する尺度であり、子どもの成長発達の理解や育児能力などを含む内容はないので、「子どもへの認識」との相関が弱いということについては研究者らの想定内の結果であった。

考察

育児期の親の特性

親の自己認識について Mercer は、出産後におこる母親役割は、相互作用的・発達的過程をふまえると述べており[58]、Benedeck は、育児を行いながら子どもへの認識が深まり親の自己認識も成長的変化していくことが明らかになっている[59]。さらに Cowan& Cowan や小野寺の調査では、親役割が加わることにより個人内の役割意識に変化が生じ、「親としての自分」と「社会に関わる自分」も変化すると述べている[60][56]。柏木らは、親になることによる発達について、具体的に柔軟性・自己抑制・視野の広がり・自己の強さ・生きがいなど多岐にわたるとしており[26]。育児期の親を多側面から理解し支援していくことは、親子関係の構築を促し、親と子どもの成長に大きく影響をすると考える。

育児期の親性尺度の信頼性・妥当性の検討

本研究における「親性」の概念を、「親性とは、すべての人がもっているものであり、女性と男性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、他者（子ども）に対しても慈しみやいたわりをもつという性質である。ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮される。」と定義した。育児期の親性を、自己への認識と「子どもへの認識」という 2 方向性をもち、さらに自己への認識を「親役割の状態」と「親役割以外の状態」とわけた 2 側面 3 下位領域からとらえる尺度を開発することは、親性を把握するうえで大変意義がある。

育児期の親 859 名を対象に、育児期の親性尺度試作版 69 項目を用いて調査を行い、因子分析により抽出された 3 因子について、第 1 因子、「親役割の状態」、第 2 因子、「子どもへの認識」、第 3 因子、「親役割以外の状態」とサブカテゴリーの領域変更はあったが、先に設定していた構成概念の領域名を命名することができ、構成概念の妥当性が確認できた。領域変更したサブカテゴリーで、子どもとの関係性を示す 5 項目は試作版では「子どもへの認識」領域と想定していた、しかし、子どもとのスキンシップやコミュニケーションが良好な状態は、親としての自信と満足感につながると氏家[61]が述べているように、「親役割の状態」領域への変更が適切であると考える。さらに、「親役割の状態」領域に想定していた 2 項目は食事（授乳）や寝かしつけることがうまくできるかどうかという内容である。これらの育児行為を体得し子どもの欲求に的確に応答することにより、さらに子どもへの認識が深まると捉えることができ、「子どもへの認識」領域への変更も妥当であると考えた。育児期の親性尺度は、「親役割の状態（13 項目）」、「親役割以外の状態（9 項目）」、「子どもへの認識（11 項目）」と領域間の質問数のバランスもよいと判断した。

本研究の調査対象は人口 30 万人以上の中核市に住む、母親と父親であった。回答者は母親が多かったが。子どもの性別の比は平成 17 年度の国勢調査によると 104.9（0～14 歳で男性が多い）であり本調査では、106.5 とほぼ近い値であった。子どもの年齢は、本調査の対象として想定内の 0 歳から 6 歳（未就学児）の乳幼児期全般にわたっており、年齢による偏りはみられなかった。対象者の総得点は正規分布であり、これは平均値を中心に低得点から高得点の全範囲にわたっており、本研究のデータが信頼性・妥当性の検証に用いることができると確認できた。

「育児期の親性尺度(33 項目)」のα係数は、0.94 であり、3 下位領域のα係数は 0.87～0.90 であった。このことから尺度全体と 3 下位領域は、充分な内的整合性が確認された。さらに、再テスト法によっても親役割の状態と子どもに対する認識は高い安定性を示し、再現性においても比較的安定した尺度であると考えられる。しかし育児期の親性尺度全体と親役割以外の状態ではやや低い値を示していた。これは、対象者が少なかったことと、育児期の親の心理特性として日常生活の様々な条件から自己認識が、変化しやすいからだと言える。

基準関連妥当性については、育児期の親性尺度総得点と「親役割の状態」「親役割以外の状態」「子どもに対する認識」と母性意識尺度の「MP 項目」とは正の相関が、「MN 項目」とは負の相関が認められ関連があることが明らかになった。このことから、親であることを肯定的に受け止め、親になることで人間的に成長できたと認識するほど育児期の親性が高く、逆に育児の負担や自分の行動の制限など、否定的意識が強いと親性は低いということが示された。

育児期の親性尺度の有用性について

親になるプロセスの理解を深めるためにも、2 側面 3 下位領域を測ることができる育児期の親性尺度は有用であると考える。母親だけでなく、父親も対象とすることができる尺度であり、質問数も 33 項目と出産時の疲労が残っている母親にも大きな負担をかけずに短時間で回答することができる。子どもの成長に伴って変化する親の認識を多側面から捉えることができる育児期の親性尺度は、臨床だけではなく地域で育児を行っている様々な立場の親を理解するために使用することができると考える。

本尺度の活用については、単純に親性が良い・悪いと評価するのではなく下位領域の得点が平均よりはるかに低い場合、その内容についてアセスメントし具体的な支援につなげていくことが重要である。自己認識を「親役割の状態」と「親役割以外の状態」から評価することができるので、その葛藤と調和について把握することも可能である。また、子どもへの認識についても子どもへの感情と理解だけでなく、授乳や寝かしつけるという育児能力もアセスメントす

ることができ、適切なタイミングで育児方法を提供することができる。

(3) 出産直後の対象者に関する育児期の親性尺度の信頼性・妥当性の再確認

育児期の親性尺度（33 項目）の育児期の親（0 歳～6 歳：未就学児）を対象として信頼性と妥当性は確認できたが、出産直後の親に対しても、有効な尺度であるかどうかの確認のための調査を行った。

出産直後の親 237 名（初産婦とそのパートナー161 名、経産婦とそのパートナー76 名）を対象として信頼性と妥当性を検討した。

結果と考察：信頼性については、育児期の親性尺度(33 項目)の α=0.94 であり、3 下位領域の α=0.87～0.90 であり、尺度全体と 3 下位領域は高い内的整合性が確認できた。

妥当性については、育児期の親性尺度総得点と「親役割の状態」、「親役割以外の状態」、「子どもへの認識」と母性意識尺度の MP 項目とは正の相関(rs=0.39 ～0.59 $p<0.01$)が、MN 項目とは負の相関が(rs=-0.21～-0.44 $p<0.01$)みられ関連があることから妥当性が確認できた。

以上の結果から、育児期の親性尺度（33 項目）は、出産後の親を対象としても有効な尺度であることが確認できた。

3)第 3 段階（目的 3）：育児期の親性尺度を用いて、出産から 12 ヶ月後までの親性の変化および親性と家族機能との関連を明らかにする（主論文）

研究者らが開発し、信頼性と妥当性の検討を行った育児期の親性尺度（33 項目）を用いて、母親と父親を対象に出産後から 12 ヶ月後までの親性の変化および親性と家族機能との関連を明らかにすることを目的に調査を行った。

Ⅳ．出産から 12 ヶ月後までの親性の変化および親性と家族機能との関連

1.緒言

我が国の 2010 年の合計特殊出生率は 1.39 であり、前年(1.37)よりやや上昇したものの依然として少子化問題は日本社会の基盤にかかわる問題である。少子化の原因として、「育児への不安」「仕事と子育ての両立の負担感」「夫の育児の不参加」「妻の精神的・身体的負担の増大」があり、社会的支援だけではなく、親の気持ちに寄り添った具体的な生活支援が必要である[3)]。また、近年増加している子どもへの虐待についても、その背景として「親としての未熟性」「過大な育児負担による子育ての不安」「社会からの孤立」が挙げられ、周産期から親子に関わりを持つ看護職による子ども虐待の予防と早期発見、早期対応の重要性が指摘されている[5)6)]。そのためにも、出産後の母親と父親が、どのような

プロセスで子どもへの認識を深め、親役割を獲得していくのか、また、お互いの関係性が親になるプロセスにどのように関連しているのかを把握することは、対象理解につながり、新たな看護を創出すると考える。

我が国においては、従来「母性」「父性」という言葉が親の特性を示す意味で用いられてきた。しかし、これらは、家長制度を中心とする歴史的背景をもち、「父親は仕事、母親は、家事・育児に専念するほうが良い」とする性別役割分業観に基づく概念を含んでいた。しかし、核家族の増加と女性の社会進出が進み、男女共同参画社会の実現が求められている現代社会において、男女が共に相当の権利と責任を果たす存在として公平に社会に位置づけられるという認識が徐々に浸透し、我が国でも 1990 年代から母親だけではなく父親をも対象とする子育てに関する調査結果から、母親も父親も親としての役割認識や子どもへの感情に性差はないという結果が明らかにされた[8)62)63)64)]。親女性と男性に共通する親の特性を理解することが重要であるという視点から、近年、性差を問わない母親と父親に共通する特性をもつ「親性」という用語が注目されてきたが我が国における明確な概念定義はされておらず社会的認識も低い[18)]。そこで研究者らは、国内の文献検討を基に、我が国における親性を「すべての人がもっているものであり、女性と男性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、他者（子ども）に対しても慈しみやいたわりをもつという性質である。ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮されると定義した[65)]。

初めての子どもが生まれた後、夫婦の生活は一変し家族としても大きな変化を強いられる。新たな親役割を受容するとともに家族システムの調整が必要となる。乳幼児期の子育てに最も深くかかわりを持つ看護職者にとって、出産後からの親性の変化を親になるプロセスとして考え、家族機能との関連を把握することは対象理解のために重要である。我が国においては、母親の育児不安や児に対する愛着、母親の意識といった母親を対象とした縦断的調査は行われているが[12)13)14)]、父親をも対象とし、その変化と家族機能との関連性についてはまだ明らかにされていない。そこで、本研究の目的を初めての子どもを出産した母親と父親の出産から 12 ヶ月後までの親性の変化および親性と家族機能との関連を明らかにすることとした。

2.　研究方法

1)調査項目

対象者の属性、「育児期の親性尺度（33 項目)」、「家族アセスメントインベントリー（Family Assessment Inventory 以下 FAI:30 項目）」

「育児期の親性尺度」は、親としての特性を自己への認識と子どもへの認識の 2 側面から評価でき、自己への認識は、「親役割の状態」と「親役割以外の状態」で構成され、「子どもへの認識」を加えた 3 つを下位領域とする尺度である。「親役割の状態」には、親役割の満足感・育児への関心・子どもとの関係が含まれ、「親役割以外の状態」には、親としての以外の自分への満足感・自己肯定・社会との関係が含まれ、「子どもへの認識」には、子どもへの愛情・子どもの様子と成長発達の理解・育児能力が含まれる。回答は、「まったくそのとおり」「そのとおり」「どちらともいえない」「違う」「まったく違う」の 5 段階評定法である [66]。

FAI は、西出が Olson[67]の円環のモデルを基に、日本人の家族を対象として開発した家族システムの機能状態を把握するための尺度であり、下位領域は、「家族内のコミュニケーション」、「家族システムの柔軟性」、「家族内ルール」、「家族に対する評価」、「家族の凝集性」である。回答は「非常によくあてはまる」「あてはまる」「だいたいあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の 6 段階評定法である [31]。

2)調査の手続き

研究協力の得られた A 県の 8 ヶ所（総合病院 1 ヶ所、単科の病院 1 ヶ所、クリニック 6 ヶ所）の施設において、母子同室後、産婦の疲労の回復（2 日目以降）を待って初産婦とそのパートナーに調査用紙の配布を行った。配布にあたっては、初めて親になるという基準のみで対象属性による選別は行わなかった。入院日数は経膣分娩の場合は平均 5 日、帝王切開の場合は、平均 8 日である。全施設で経膣分娩の場合は、希望で夫立ち会い分娩が可能であった。その他施設間で診療内容や母親教室内容など大きな差異はなかった。

調査用紙配布後、1 週間以内に回答していただき郵送にて回収を行った。継続調査同意については、初回配布時に同意書への記入していただき、夫婦伴に同意が得られた方に 1 ヶ月後と 3 ヶ月後、6 ヶ月後、12 ヶ月後に調査用紙を郵送し、回収を行った。1 ヶ月後以降の調査用紙は、番号による連結可能匿名化とした。

調査用紙の配布・回収期間は、平成 19 年 10 月～平成 21 年 7 月である。

3) 分析方法

育児期の親性尺度の経時的変化の検討に、Friedman 検定と多重検定については、Wilcoxon の順位検定を用い、Bonferroni の補正を行った（Bonferroni correction)。育児期の親性尺度と FAI との関連は、Spearman’s の順位相関係数を親性に影響する要因については、Mann-Whitney の検定を用いて検討した。なおデータ分析には統計解析ソフト spss18.0j for Windows を用いた。いずれの検定も危険率 5%未満を有意とみなした。

4)倫理的配慮

本研究は、名古屋大学医学部の倫理委員会の承認を受けて行った(承認番号：6-166)。研究の趣旨と研究協力は自由参加であること、希望によりいつでも辞退することができること、調査を拒否することにより不利益を受けないこと、プライバシーの保護等について文書で説明し、同意書にて同意を確認した。データは鍵のかかる場所に保管し、調査票はナンバーリングをして名前や住所が特定されないように配慮した。

3. 結果

1)対象者の属性（表 6）

380 組（760 名）に配布し、継続調査同意者は 46 組 92 名（12.1%）であった。そのうち 12 ヶ月後まで、継続して回答した母親 41 名・父親 37 名の計 78 名（有効回答率 84.8%）を本研究対象者とした。そのうち 1 組は、12 ヶ月後の時点で離婚していた。

対象者の属性は、平均年齢が、30.63±3.82 歳（23-42 歳）で、平均結婚期間は、27.13±20.31（6-90 ヶ月）有職者は 54 名（産後休暇者を含む 69.2%)、無職者は 24 名（30.8%)、産後休暇と育児休暇を習得していた母親 14 名（34.1%）のうち、12 ヶ月後に職場復帰したものは 2 名であった。核家族が 66 名（84.6%）拡大家族は 10 名（12.8%)、経膣分娩 70 名（89.7%）帝王切開 8 名（10.3%)、立ち会分娩 59 名（75.6%)、子どもの性別は男 40 名（51.3%）女 38 名（48.7%）であり、12 ヶ月時点で特に心身に問題のある児はいなかった。

2)育児期の親性尺度と FAI の信頼性の検討(表 7)

育児期の親性尺度(33 項目)の Cronbach’s α=0.92～0.94 下位領域ではα=0.80～0.88、FAI(30 項目)の Cronbach’s α=0.93～0.94、下位領域では、家族内ルールがα=0.62～0.73 というやや低い値を示していたが、その他の領域ではα=0.79～0.90 という値を示しておりほぼ高い内的整合性が得られた。

3)出産から 12 ヶ月後までの親性の経時的変化について

(1)育児期の親性 2 側面・3 下位領域間の関連について(表 8)

育児期の親性 2 側面・3 下位領域間の関連性についてみると、自己への認識と子どもへの認識間では rs=0.45～0.55、「親役割の状態」と「親役割以外の状態」では、rs=0.65～0.78、「親役割の状態」と「子どもへの認識」では rs=0.48～0.53、「親役割以外の状態」と「子どもへの認識」では、rs=0.40～0.49(p<0.01)といずれも中程度以上の正の相関がみられ、それぞれ関連があることが明らかになった。

(2)育児期の親性尺度の変化

母親と父親では、親性の総得点、2 側面 3 下位領域ともに有意な差はみられなかった。**(表 9)**

育児期の親性尺度の総得点は、出産(125.38±13.03)から 1 ヶ月後(126.87±12.64)にかけては大きな変化はなかったが、出産から 3 ヶ月後(132.55±13.39)と 1 ヶ月後から 3 ヶ月後にかけて有意に高くなり(p<0.001)、3 ヶ月から 12 ヶ月後(133.30±14.31)にかけては、有意な差はみられなかった。

2 側面 3 下位尺度の得点の変化をみると、自己への認識得点は、出産(89.92±9.76)から 1 ヶ月後(90.02±9.30)にかけては有意な差はなかったが、その後 3 ヶ月(92.28±9.21)にかけてと 1 ヶ月後から 3 ヶ月後にかけて有意に高くなり(p<0.05)、3 ヶ月から 12 ヶ月後(91.29±11.01)までは、有意な差はみられなかった。自己への認識の中の「親役割の状態」も同様に出産(55.23±6.12)から 3 ヶ月後(57.05±5.20)と 1 ヶ月後(55.41±5.65)から 3 ヶ月後にかけて有意に高くなり(p<0.05)、3 ヶ月から 12 ヶ月後(56.34±6.14)にかけては、有意な差はみられなかった。「親役割以外の状態」は、出産から 12 ヶ月後まで常に大きな変化がみられなかった。子どもへの認識得点は、出産(35.28±5.03)から 1 ヶ月後(36.86±5.03)にかけて有意に高くなり(p<0.05)、その後 3 ヶ月(40.10±5.56)にかけてさらに有意に高くなり(p<0.001)、3 ヶ月から 12 ヶ月後(41.65±5.01)にかけても有意な差で高くなっていた(p<0.05)。**(表 10)**

(3)育児期の親性に影響する要因(表 11)

親性に影響する要因として、出産後で生活に不安があると回答した人の自己への認識得点は 85.06±9.14、不安なしと回答した人は 91.68±9.49、親役割の状態得点では、不安があると回答した人は 52.06±6.26、不安なしと回答した人は 54.43±5.11 で有意な差がみられた(p<0.05)。1 ヶ月後では、生活に不安があると回答した人の親役割の状態得点は 54.43±5.11、不安なしと回答した

人は 55.78±6.01 で有意な差がみられた(p<0.05)。心身の状態が快調と回答した人の親役割以外の状態得点は 35.56±3.95、どこか不調と回答した人 32.59±5.23 で有意な差がみられた(p<0.01)。3 ヶ月後・6 ヶ月後・12 ヶ月後も同様に、心身の状態と生活の不安の有無については、自己への認識、親役割の状態、親役割以外の状態に影響していた。12 ヶ月後では、生活に不安があると回答した人は 40.04±4.45、不安がなしと回答した人 42.29±4.95 で有意に低かった(p<0.05)。その他最終学歴、家族形態、妊娠中の問題の有無、出産状況、立ち会い出産の有無、里帰り出産の有無、子どもの性別、子どもの心身の状態、妊娠前の乳幼児との接触体験の有無、被養育体験では有意な差はみられなかった。

4)育児期の親性と家族機能との関連

(1)FAI 総得点の変化 (平均値と SD と範囲 range)

FAI の総得点は、出産後 135.28±16.45(74-169) 、1 ヶ月後 134.55±117.57(73-180)、3 ヶ月後 136.06±16.50(95-180)、6 ヶ月後 134.58±16.22(107-173)、12 ヶ月後 134.17±15.81(104-174)であり経時的にみて有意な差はみられなかった。

(2)育児期の親性尺度と FAI との関連

育児期の親性尺度総得点と FAI 総得点との関連をみると出産後 rs=0.47、1 ヶ月後 rs=0.45、3 ヶ月後 rs=0.58、6 ヶ月後 rs=0.52、12 ヶ月後 rs=0.61(p<0.01)と中程度の正の相関がみられ、徐々にその関連性は強くなっていた。

育児期の親性尺度の下位領域と FAI の下位領域間との関連性をみると表 11 に示すように、子どもへの認識に比べて自己への認識と FAI との関連性は強く、特に自己への認識と「家族内のコミュニケーション」「家族システムの柔軟性」「家族に対する評価」「家族の凝集性」とは各時期を通じて中程度の正の相関がみられた。一方、親性の 2 側面と家族内ルールとは、相関がみられないか、みられても弱い正の相関であった。**(表 12)**

4. 考察

1)出産から 12 ヶ月後までの親性の変化について

Erikson は成人期の発達課題として、親密性(intimacy)と生殖性(generativity)があり、この時期は、結婚・出産・育児というイベントにより Identtity に大きな変化が起こると述べている[20)]。

本研究では、親の特性をしめす「親性」を自己への認識と子どもへの認識という 2 側面、さらに自己への認識を「親役割の状態」と「親役割以外の状態」とに分けて「子どもへの認識」を加えた 3 下位領域で捉え、出産後の親性の変化

を親になるプロセスとして把握することにした。その結果、自己への認識と子どもへの認識の2側面と「親役割の状態」「親役割以外の状態」「子どもへの認識」という3下位領域間はそれぞれ強い関連性を示し、それぞれに影響し合っていることが明らかになった。

母親と父親では、親性の総得点、2側面3下位領域ともに有意な差はみられなかった。これは、母親も父親も同様に子どもに接しながら、子どもへの認識を深め、親としての役割を受容しており、性差による違いがないからだと考えられる。

親性全体と自己への認識と子どもへの認識2側面は、1ヶ月後から3ヶ月後にかけて大きく向上し、その後12ヶ月までは安定している状態であることがわかった。自己への認識の中では、「親役割の状態」は、1ヶ月から3ヶ月後にかけて向上しその後安定していたが、「親役割以外の状態」は、変化なく安定した状態を示していた。Rubinは母親役割(maternal role)の受容プロセスとして、出産3週間後の取り込み(taking-in)と、取り入れ(taking-on)および解放期(letting-go-phase)の積極的行動へと移行し、続いて2〜3ヶ月後にかけての母子の絆形成(binding-in)があると報告している[22]。Mercerらも、出産から1ヶ月までの身体的回復の段階(Physical Recovery Phase)、2〜4・5ヶ月までの達成の段階(Achievement Phase)、6〜8ヶ月までの混乱の時期(Disruption Phase)があるとその段階を報告しており[58][68]、出産後から段階によって変化するという本研究結果はRubinやMercerらの考えを追随していた。

特に、親性の変化として大きな変化がみられた、出産から3ヶ月後は、親にとって重要な時期である。これは産後うつ病の好発時期とも一致している[69]。親性が低い状態のままか、徐々に低下している場合は、その原因を探り看護介入が必須となる。

出産から1ヶ月後にかけては、Rubinが言う開放期(letting-go-phase)であり、新しい役割を獲得するために様々なことを経験するが、自分の子に合わせた育児方法を模索し、試行錯誤が続く時期である。本調査の結果から自己への認識領域で出産から1ヶ月後にかけて大きな変化がみられなかったのは、Mercerのいう身体的回復段階（Physical Recovery）の時期で、分娩からの身体回復期の途上であり、育児への試行錯誤の過程であったということで説明できる。しかし、子どもへの認識領域は、出産後から徐々に高くなっていることから、育児能力を獲得しながら子どもへの理解を深めている様子が伺えた。親性で大きな向上がみられた3ヶ月時は、子どもの成長・発達特徴では、首がすわり、喃語もみられ、あやすと笑うようになるという親子の関係性が表在化する時期である。親が育児スキルを獲得し、授乳や睡眠のリズムも整い生活が安

定する時期である。この時期までに、特に親役割の状態と子どもへの認識について出産後から低いままの状態か、徐々に低下している親については、その原因を明らかにし、親性向上への看護介入の必要がある。本研究の結果では、3ヶ月から12ヶ月後にかけて親性が安定した状態を示していたが、Mercerらは、6ヶ月後以降Disruption Phaseがあると述べており[58]、この時期の子どもは、お座りができ動きも活発になるなど成長発達が著しい時期である、喜びも増すとともに育児に追われ、十分に身体が休めない状況にあることと、親としての自分と親役割以外の自分の役割葛藤が起きる時期であるとしている。本研究では、対象者に父が含まれることと、約8割の親が心身の状態が快調であり、役割の受容が順調であったことが伺え、混乱がみられなかったと考える。親自身の自己認識と子どもへの認識とは関連性があることからも、親自身の認識と育児スキルの伝授や子どもへの認識が深まる関わりは、相乗効果を生み親性の向上に繋がる。

本研究結果から、親の心身の状態と生活への不安という要因が親性、特に自己への認識に影響することが明らかになった。服部や原田らの調査によると育児について一番心配だった時期として、出産から1ヶ月と6ヶ月から1歳前後を多くの親が挙げており[70][27]、身体回復が思わしくなかったり、育児への不安が強い場合は親性も低下することが予測される。Mercerも、母親の健康状態を母親役割獲得に影響する1要因として挙げており[58]、妊娠中あるいは出産時の母親の疾患は、女性の自尊心に影響するとしているが、育児期においても心身ともに良好な状態が親としての自信や育児への関心につながることが示唆された。さらに、生活の不安の有無も同様に、親役割の受容を妨げ、自己肯定感を低下させる要因になると考えられる。Mercerらは、母親役割獲得に影響する要因の一つとしてとして子どもの状態と気質を挙げている[58]、本研究では、心身の状態に問題のあった子どもはいなかったが、病気や障がいを抱えている子どもの親は心配や不安と育てにくさを感じ、子どもへの認識側面が低下することが予測される。看護介入の前提として、親の心身の状態と親の不安の有無、親を取り巻く生活環境をアセスメントすることが必須である。

自己への認識の中で、親役割の状態が大きな変化を遂げていたのに比べて、親役割以外の状態が常に安定していたのは、妻や夫としての役割意識や社会とのつながりと自分自身への信頼感や生き方等の自己肯定観は出産以前にすでに確立されていたものであり、出産というイベントで変化するものではなかったと推察することができる。Cowan&Cowanらは、自尊感情は、妊娠期から親になって18ヶ月経過しても安定していると報告しており[60]、小野寺も、男女ともに気質的な側面を示す自己概念は親になっても比較的安定していたと述べてお

り[56]、本研究はそれらを追随する結果となった。しかし、今後母親の仕事復帰の希望や家庭での孤立感などが表出されることも予測でき、引き続き調査を続け、変化を把握する必要があると考える。

本研究では、母親だけではなく父親も対象としており、性差がみられなかったことから父親も母親と同様に段階を追って親役割の受容プロセスをたどっていることが分かった。柏木らは、親になることによる成長と発達について、柔軟性・自己抑制・視野の広がり・運命と信仰の受容・生きがい・自己の強さを挙げており、母親のほうが父親と比較して高かったと報告している[21]が、Robinson らは、父親も母親同様に親としての感情は出産後一時的にストレスを感じるがその後 3 ヵ月後にかけては上昇しその後安定すると述べている[71]。しかし、目良が述べているように子どもへの接触時間や社会的立場から母親と父親で差がみられることも予測され[72]今後も長期的な調査が必要であり、母親だけではなく、父親に対しても関わることの重要性が再確認できた。

2)親性と家族機能との関連について

第一子の誕生は、家族の生活に大きな変化を起こし、メンバーは妻から母親へ、夫から父親へと新しい役割に対応することになる。出産から約 1 年の間は、親密な関係であった家族集団の中に新しいメンバーが加わることによって、それまでの家族バランスが崩れ、新しい関係づくりが始まる時期である。この新しい関係づくりが家族の発展であり、発達である。また出産から育児期にかけては夫婦の 2 者関係から子どもを含めた 3 者関係へ家族システムを再編成する時期であり育児によって増大した家庭内役割の分担と親役割の受容が重要となる[73]。そこで顕在しやすい夫婦間の危機として親役割の不適応が挙げられる。Belsky らは、子どもの誕生は夫婦関係の親密さや満足感を低下させると報告しており[74]、Twenge らの報告からも子どもが生まれた後、結婚満足度は、役割葛藤と自由の制限のために低下していくと述べている[75]。これらのことから、親になるプロセスでは、夫婦の関係性をアセスメントすることが重要である。本研究結果から出産から 12 ヶ月後にかけて、育児期の親性尺度全体と FAI 全体は、強い関連性を示しその度合いは徐々に強くなっていた。これは、親個人と家族とは強く影響し合っており、順調な親役割の受容過程において良好な家族機能を保つことが重要であるということが示唆されている。家族を社会文化的、歴史的な環境との相互作用によって成り立っているとみる家族システム理論から述べられているように、家族システムの特性である「家族成員の変化は必ず家族全体の変化として現れるという全体性（Wholeness)」と、「1 家族成員の行動は、家族内に次々と反応を呼び起こすとする循環的因果関係」と捉えること

が可能である。さらに、個人は、家族の相互作用を通じて身振りやその意味を学ぶという家族相互作用モデルの視点から、 親個人は、配偶者やその他の家族と協力することで、育児を学び親としての役割を獲得していくということが理解できる[29]。さらに家族相互作用モデルが提唱する、看護ケアを導く3つの概念①家族経歴②個人の発達③健康・疾患・病気のうち[76]の②個人の発達を本研究では親性の変化として捉えているので、親性を促すために、家族メンバー間の相互作用に働きかけることが重要であると考える。氏家らは、母親の適応過程についての追跡的調査から、育児や家事の分担が十分に行われず感情や体験が夫と共有されていない場合は、母親の不安が強く適切な母親役割が担えないとし、その問題の解消プロセスでは、関心が子どもに向き始め、感情や体験を夫と共有できるようになり夫婦間の親密さが深められたという例を報告している[77]。本研究の結果からも、家族内のコミュニケーションと、役割の調整等によるシステムの柔軟性を促すことで、家族の絆は深まり家族の評価は上がると考える。FAIの総得点は、経時的変化が見られず、家族の発達を評価できなかったが、親性の変化を評価することができることから出産後3ヶ月までに親性が低い場合、家族機能も良好でない可能性が予測されるため、家族機能に介入することが親性の向上につながるとも考える。

子どもへの認識領域に比べ、自己への認識とFAIとの間で強い関連がみられたことから、看護介入については出産後、育児スキルの獲得や子どもの情報の提供はもちろん、親自身が親としての自分、親役割以外の自分についてどのように考えているのかを的確に把握し、自己肯定観を高められるように働きかけることが重要である。そのためには家族内のコミュニケーションを促し、役割の調整やシステムが柔軟性を保てる夫婦のサブシステムへの働きかけが必要である。親性と家族内ルールの関連性が低かったのは、子どもの年齢が低いという家族の発達段階の特徴を表していると考える。

5.研究の限界と今後の課題

出産後からの調査にもかかわらず78名の方々が継続的調査に協力してくださり大変貴重な回答を寄せていただいた。しかし、対象者の人数の少なさからこの結果を一般化するには研究の限界がある。長期間におよぶ参加者は常に育児に関心を持っており、親になることを肯定的にとらえ親役割の受容がスムーズに行えているとも考えられる。また今回の結果からは各期における尺度のカットオフ値を示すことができなかった。本調査結果を一般化するためにもさらなるデータの蓄積が必要である。

さらに、本調査は、長期にわたる子育てのほんのわずかな間での調査であった。

妊娠期からや 12 ヶ月以降の調査を進めることで、今回大きな変化がみられなかった親役割以外の自己認識領域についての社会とのつながりとの影響について理解を深めていきたいと考える。

6. 結論

育児期の親性尺度を用い、出産から 12 ヶ月後までの親性の変化および親性と家族機能との関連を明らかにすることを目的に、初めて親になった 78 名の方を対象に調査を行った。その結果、育児期の親性尺度の総得点および自己への認識と子どもへの認識は、出産から 3 ヶ月後にかけて向上しておりその後 12 ヶ月まで安定した状態であった。よって、出産から 3 ヶ月後にかけては、親になるプロセスにおいて大きな変化を遂げる時期であり、看護支援が重要となる。親の心身の状態と生活の不安が育児期の親性に影響を与える要因となっていることから看護介入の前提として、親の心身の状態と親の不安の有無など親を取り巻く生活環境をアセスメントすることが必要である。親性と家族機能との間には関連があることが明らかになり、特に親自身の認識と家族機能との間に関連性が強く、家族内ルール以外の 4 下位領域との関連が強かったことから、家族機能でも特にコミュニケーションとシステムの柔軟性を促す働きかけが、親性の向上につながり重要であり、親個人だけではなく夫婦のサブシステムに介入することが重要であることが示唆された。

謝辞

本研究調査において、快く協力を受諾していただいた研究協力施設の関係者の皆様と、出産後の育児期という大変な時期に調査研究を快諾していただいたご家族の方々に心から感謝申し上げます。

名古屋大学医学部保健学科の浅野みどり教授には、6 年間もの長期間にわたり、本研究の全ての過程においてご指導、ご支援を賜りました。心より感謝申し上げます。また、この研究を進めるにあたり多くのご指導・ご鞭撻を賜りました、名古屋大学医学部保健学科の奈良間美保教授、梶田悦子教授に心から感謝申し上げます。

いつも励ましあい・慰めあい、多くの支援をくださいました名古屋大学医学部保健学科の新家一輝助教授と古澤亜矢子さんをはじめとする大学院生の皆様に深く感謝いたします。

そして、いつも温かく励まし、支えてくれた私の大切な家族である夫の大橋正人と子ども達 正瑛・正卓・美緑に心から感謝します。

生きていればこの論文の完成を一番喜んでくれたであろう亡き父 今井義富といつまでも長生きしてほしい母 今井眞須美にも感謝の言葉を伝えたいと思います。

研究の第 3 段階は、平成 20 年度日本看護医療学会研究助成金を受けて実施しました。お礼申し上げます。

この論文はこれらの多くの方々の支えによって完成できたものであります。この場をお借りして今一度、心からお礼申し上げます。

皆様のご健康とご多幸をお祈りしつつ、項を終えたいと思います。

引用・参考文献

1)　厚生労働省統計情報部「人口動態統計」2011

2)　共生社会政策統括官　少子化対策・高齢社会対策,平成 16 年版　少子化社会白書,内閣府

3)　増田雅暢:これでいいのか少子化対策　政策過程から見る今後の課題,ミネルヴァ書房,12-31,2008

4)　東京女子大学女性学研究所、有賀美和子、篠目清美編、親子関係のゆくえ,頸草書房,39-67,2004

5)　山崎嘉久、前田清、白石淑江編:ふだんのかかわりから始める子ども虐待防止＆対応マニュアル,診断と治療社,23-26,2006

6)　日本看護協会:看護職による子どもの虐待予防と早期発見、支援に関する指針,2002

7)　男女共同参画社会基本法:平成 11 年 6 月 23 日法律第 78 号

8)　柏木惠子編著:父親の発達心理学　父性の現在とその周辺, 川島書店,86-132,1990

9)　寺薗さおり：子育てによる親役割達成感と親の心理的な発達との関連性,小児保健研究,第 69 巻, 第 1 号,47-52,2010

10)　根ヶ山光一編:母性と父性の人間科学,コロナ社,135-159,2001

11)　服部祥子:生涯人間発達論　人間への深い理解と愛情を育むために,医学書院,97-108,2003

12)　Miyanaka F.:Longitudinal study of changes in the mother’s consciousness after childbirth and related paternal factor: comparison between primiparas and multiparas during 18 monthes after childbirth. Japanese society of Psychosomatic Obtetrics and Gynecology,7(1),99-107,2002

13)　輿石薫:育児不安に影響を与える要因についての縦断的研究－予期不安尺度と期待感尺度の作成-.小児保健研究,61(4),686-691,2002

14)　大村典子, 光岡攝子:妊娠期から 1 年までの児に対する母親の愛着とその経時的変化に影響する要因,小児保健研究,65(6),733-739,2006

15)　新村出編:広辞苑第五版,岩波書店,2002

16)　Deutsch,H:Psychology of Woman,Vol.2.Grune and Stratton, 1945 懸田克躬,原百代訳:母性のきざし 母親の心理 1,日本教文社,1944

17)　岩上真珠:ライフコースとジェンダーで読む家族,有斐各,138-140,2003

18)　神川晃、稲見誠、田宮貞和他:父性、母性に関する意識調査、日本小児科医会会報 27,113-116,2004

19)　Havighurst,R.J.1953　荘司雅子訳:人間の発達課題と教育、牧書店、1958
20)　Erikson,E.H.1959:Psychological issues:Identity and the life cycle,International University Press,1959
21)　柏木惠子、若松素子:『親になる』ことによる人格発達　生涯発達的視点から親を研究する試み、発達心理学研究 5,72-83,1994
22)　Rubin,R.:Maternal identity and the maternal expwrience.Spring Publishing Company,1984,ルヴァ・ルービン,新道幸恵,後藤桂子訳:母性論:母性の主観的体験,1-13,117-128,医学書院,東京,1997
23)　Mercer,R.T.:A theoretical framework for study factors that impact on the maternal role,Nursing Research,30,73-77,1981
24)　Martin Greenberg 著、竹内徹訳: 父親の誕生,メディカ出版,1994
25)　岡堂哲雄編:家族心理学入門、培風館,112-115,2001
26)　柏木惠子著:家族心理学　社会変動・発達・ジェンダーの視点,東京大学出版会,198-208,2005
27)　原田正文著:子育ての変貌と次世代育成支援－兵庫レポートに見る子育て現場と子ども虐待予防－,名古屋大学出版社,224-226,2006
28)　Duvall.E:Marriage and Family Development(5th ed) JB Lippincott Philadelphia,1977
29)　村田惠子,荒川靖子,津田紀子監訳:家族看護学　理論・実践・研究,医学書院,2005
30)　Wright、L.M.、&Leahey、M.:A guide to family assessment and intervention(2nd ed)、Nurses and Families,F.A.Davis,1994
31)　西出隆紀:家族アセスメントインベントリーの作成－家族システム機能の測定－,家族心理学研究,7(1),53-65,1993
32)　古田恵香、浅野みどり:双子の母親の愛着感情の偏りにおける関連要因-出産後早期のケア、児の年齢、家族機能を中心に-、日本小児看護学会第 17 回学術集会抄録,105,2007
33)　数井みゆき、無籐隆、園田菜摘:子どもの発達と母子関係・夫婦関係:幼児を持つ家族について、発達心理学研究、7(1)、31-40、1996
34)　Murray,H.A:Exploration in personality,Oxford University Press,1938
35)　Walker,L.O.Crain,H.Thompson,E.:Maternal Role attainment and Identity in the postpartum period:Stability and change.Nursing Research,35(2),68-71,1986

36)　Grossmann,F.K.,Pollack,W.S.,&Golging,E, Fathers and children,Predicting the quality and quantiry of fathering,Developmental Psychology,24,82-91,1988
37)　与謝野晶子:人間礼拝,天佑社 1921,与謝野晶子評論集,岩波文庫 334-345,1985
38)　汐見稔幸:父親と育児,母子保健情報,20:48-50,1989
39)　汐見稔幸:母性、父性から親性へ,母子保健情報,36:10-13,1997
40)　糸魚川直祐:柏木惠子編,父親の発達心理学 父性の現在とその周辺,川島書店,148-150,1999
41)　谷向みつえ:小林芳郎監修,子どもと保育の心理学,保育出版社 210-214,2004
42)　林昭志:親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み,上田女史短期大学紀要 28:11-18,2005
43)　林昭志:親を生涯発達の観点から捉える試み-乳幼児期の親の発達について-,上田女子短期大学紀,29:1-9,2006
44)　大日向雅美:佐々木保行編,母性を問い直すとき 育児ノイローゼ,有斐閣,131-154,1982
45)　大日向雅美:日本家族心理学会編,新しい家族の誕生と創造,家族心理学年報 9,,金子書房,25-38,1991
46)　鮫島雅子:「母性」「父性」に類似する用語の検討 心理的側面の研究における概念規定への試み,鹿児島純心女性大学看護学部紀要 3:80-92,1998
47)　松岡恵:母子・父子関係の形成と夫婦関係の再構築への援助,ペリネイタルケア 新春増刊:57-64,1998
48)　小嶋秀夫:発達心理学事典,ミネルヴァ書房,674,1996
49)　小嶋秀夫:親となる過程の理解　母性の心理・社会学,95,医学書院,1991
50)　岩田崇,秋山泰子,井上義朗他:青年期の親準備性の関する研究,厚生省心身障害研究報告書:466-467,1982
51)　井上義朗,深谷和子,岩田崇他:青年の親準備性に関する研究(2), 厚生省心身障害研究報告書:261-267,1982
52)　井上義郎,深谷和子:青年の親準備性をめぐって,周産期医学 13:2249-2252,1983
53)　原ひろ子:原ひろ子,舘かおる編,母性から産み育てる社会のために次世代育成力へ,新曜社,305-330,1991
54)　小嶋秀夫,速水敏彦,本城秀次編:人間発達と心理学,金子書房 110-111,2000

55)　山崎あけみ:育児期の家族の中で生活している女性の自己概念-「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析-,日本看護科学会詩,17(4),1-10,1997
56)　小野寺敦子:親になることによる自己概念の変化,発達心理学研究14(2),180-190,2003
57)　大日向雅美、母性の研究その形成と変容の過程:伝統的母性観への反証,川島書店,135-169,1996
58)　Mercer,R.T.:First time motherhood:Experience from teens to forties,New York Springer,1986
59)　Benedeck,T.:Parenthood Its psychology and psychopathology,185-206,Jason Aronson Publishers.Inc.1970
60)　Cowan,P.A.,&Cowan,C.P.:Changes in marriage during the transition to parenthood:Must we blame the baby? In G.Y.Michaels,& W.A. Goldberg(Eds.),The transition to parenthood. New York : Cambridge University Press,114-154,1988
61)　氏家達夫:親になるプロセス(認識とプロセス),金子書房,1996
62)　小野寺敦子,青木紀久代,小山真弓:父親になる意識に形成過程.発達心理学研究,9(2),121-130,1998
63)　山内ひろみ,松尾祐作:男性の養護性の発達に関する研究,福岡教育大学紀要,50(4),247-253,2001
64)　森下葉子：父親になることによる発達とそれに関わる要因,発達心理学研究,17(2),182-192,2006
65)　大橋幸美,浅野みどり:親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討-親性の概念明確化に向けて-,家族看護学研究,15(1),56-64,2009
66)　大橋幸美,浅野みどり：育児期の親性尺度－信頼性と妥当性の検討－,日本看護研究学会,Vol.33,No.5,2010,45-53
67)　Olson,D.H.&Gorall.D.M.(2003):Circumplex model of marital and family systems.In F.Walsh(Ed.)Normal Family Processes(3rdED).New York:Gilford(pp.514-547)
68)　Mercer,R.T.:Becoming A Mother :Reserch on maternal role identity from Ribin to the present Ramona T. Mercer, Springer Publishing Company,1995
69)　岡野禎治：うつ、不安などの精神疾患,周産期医学編集委員会編:周産期の症候・診断・治療,東京医学社,161-164,2007(37)増刊号
70)　服部祥子　原田正文：乳幼児の心身発達と環境－大阪レポート

と精神医学的視点,名古屋大学出版会,1991
71) Robinson,B.E.,Barret,R.L.:The Developing Father,The Guilford Press,1986
72) 目良彩子：父親と母親の子育てによる人格発達,発達研究,16,87-98,2001
73) Friedman M,M.Bowden V,R. Jones E,G.:Family Nursing: Research,Theory,and Practice,Upper Saddle River, New Jersey(5th ed),103-150,2003
74) Belsky,J.:Children and Marriage.In F.D.Fincham,& T.N.Bradbury(Eds.),The psychology of marriage, New York Guiford,172-200,1990
75) Twenge.J.M.Campbell.W.K.Foster.C.A.2003.Parethood and Marital Satisfaction: A Meta-Analytic Review.Jounal of Marriage and Family 65 574-583
76) 鈴木和子,渡辺裕子:家族看護学 理論と実践,日本家族協会出版会,52-57,2007
77) 氏家達夫, 高濱裕子：3 人の母親：その適応過程についての追跡研究,発達心理学研究,5(2),123-136,1994

表

表1 「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」の文献検索結果

用語		親性 31件	育児性 15件	養育性 14件	養護性 25件	親(性)準備性 23件	次世代育成力 12件
学問分野	看護学	11	7	3	5	2	2
	医学	6	2	7	0	6	2
	教育学/心理学	10	5	3	17	9	8
	福祉/保育学	1	1	1	3	4	0
	家政学	1	0	0	0	0	0
	社会学	1	0	0	0	1	0
	人間文化学	1	0	0	0	0	0
	文化情報学	0	0	0	0	1	0

表 2 「親性」とそれに類似する用語の検討　　著者らが考える概念と共通する内容

用語	年	提唱者	種類	視点	意味
親性	1921	与謝野晶子	書籍	人間的表現・人間的活動	親としての精神は男女同一等しく人間性の表現である
	1989	汐見稔幸	総説/概説	親であることの自覚と役割を強調	親であることと、その立場を自覚し、その役割を正しく強調することが、より積極的な意味を持ちうる
	1990	糸魚川直祐	書籍	生物的な性にとらわれない親としての一般的な性質	人類の成人が生物的な性に拘束されていても、その拘束にとらわれずに両性の行動と役割を担うべき本来的な方向性をいう実子の保育、保護に限らず、弱い立場の仲間に対する保護、攻撃抑制、受容、理解を基盤とすべき
	1998	鮫島雅子	原著	「親性」と「育児性」を区別して提示	生物学的性差を認めた上で、両性ともに、親となることにより発達する個人の人格的特性
	2003	谷向みつえ	書籍	誰もが持つ特性であり、その豊かさは個人差による	親として育ちゆく命である子どもを慈しみ育もうとする心性 性別や年齢に関係なく、子の親であるかどうかに限らない
	2005	林昭志	原著	親の発達を生涯発達の観点から捉える事が重要	親が自分の子どもを養い育てようとする性質
育児性	1982	大日向雅美	書籍 総説/概説	性差を超えて子どもを育む視点	各自の個性と相手の人格とを尊重した男女(夫婦)関係のもとで、新しい家族の誕生を迎えることが望ましい
	1998	鮫島雅子	原著	「親性」と「育児性」を区別	生物学的性差を問わず、個人の育児能力を統合するもの、そして、親から子どもへの方向性がある
養育性	1998	松岡恵	書籍	対人関係の基本的な能力を基礎 他者へ共感的理解	子どもに対する養育行動や養育態度などは母親と父親に共通の概念 妊娠・分娩・出産の経験を通じて発達
養護性	1996	小嶋秀夫	原著 書籍	ナーチュランス(nurturance)相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能という視点	発達途上にある対象に、栄養・支援・励ましなどを与えることを通じて、その発達を促進させる。自分よりも幼い子に限らず老人や落胆している人、ペットや植物をかわいがったり、世話をしたり、力になろうとする気持ち。
親(性)準備性	1983	岩田崇 井上義郎ら	原著	プレ親期(青年期)の重要性	望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期における、価値的・心理的態度や行動的・知識的側面の準備状態
次世代育成力	1991	原ひろ子	書籍	種としてのヒトが各社会単位ないしは、種全体として次世代を育てていく能力確保の重要性を強調	「男性による」とか「女性による」という対立を超えて、人々が共に考え、共に尊重し合いながら、次世代へものごとを引き継ついでいく 家族を超えた人と人との絆の中で子どもが育つ

表 3　対象者の属性　n=859

性別	女性	484 名(56.3%)
	男性	375 名(43.7%)
年齢		34.8±4.7(20-54)
職業の有無	あり	617 名(80.3%)
	なし	240 名(29.3%)
	無回答	2 名(0.6%)
家族形態	核家族	690 名(80.3%)
	複合家族	140 名(16.3%)
	ひとり親家族	19 名(2.2%)
	ステップファミリー	3 名 (0.3%)
	無回答	7 名(0.9%)
子どもの人数		1.9±0.7(1-6)
子どもの月齢		39.8±19.9(0-90)
子どもの性別	男	442 名(51.5%)
	女	415 名(48.3%)
	無回答	2 名 (0.2%)

表4 育児期の親性尺度 Ver.1 因子分析 33項目

			1	2	3
親役割の状態	13項目	問65. 私は、子育てに充実感を感じていませんR	**0.79**	−0.10	0.08
		問58. 私は、育児をすることに満足感を感じていませんR	**0.73**	−0.12	0.09
		問4. 私は、育児に関心があります	**0.72**	0.12	−0.25
		問39. 私は、子どもとスキンシップがとれていませんR	**0.71**	0.04	0.01
		問28. 私は、子どもに関わる時間を大事にしていませんR	**0.65**	0.01	0.05
		問5. 私は、子どもと関わる時間を充分にとりたいと思います	**0.64**	0.04	−0.16
		問32. 私は、育児をすることに喜びを感じています	**0.60**	0.14	−0.05
		問42. 私は、親としての充実感を感じていませんR	**0.56**	0.02	0.23
		問48. 私は、子どもとの関係に満足していませんR	**0.54**	0.02	0.06
		問47. 私は、親としてだけの自分をむなしいと思いますR	**0.51**	−0.23	0.29
		問62. 私は、子どもによく話しかけています	**0.46**	0.27	−0.03
		問45. 私は、子どもとコミュニケーションがとれています	**0.46**	0.34	−0.05
		問44. 子どもは、いつも私がいやがることをしますR	**0.44**	−0.11	0.15
子どもへの認識	11項目	問11. 私は、子どもの欲求がよくわかります	−0.16	**0.75**	0.03
		問43. 私は、子どもの性格がわかります	−0.10	**0.72**	0.03
		問27. 私は、子どもの個性がわかります	−0.16	**0.71**	0.08
		問2. 私は、子どもの様子がよくわかります	0.07	**0.69**	−0.14
		問17. 私は、現在の子どもの発育がよくわかります	0.09	**0.65**	−0.07
		問30. 私は、子どものこれからの発育の様子を想像することができます	−0.08	**0.44**	0.14
		問23. 私は、子どもを寝かしつけることがうまくできます	0.22	**0.44**	−0.15
		問14. 私は、子どもの気持ちがわかりませんR	0.12	**0.42**	0.17
		問38. 私は、子どもに喜びを与えていると思います	0.35	**0.41**	0.05
		問55. 私は、子どもの食事(授乳)の世話がうまくできます	0.19	**0.40**	0.04
		問66. 私は、子どもに信頼されていると思います	0.32	**0.40**	0.06
親役割以外の状態	9項目	問51. 私は、親として以外の自分は充実していると思えませんR	0.11	−0.16	**0.75**
		問25. 私は、親として以外の自分に満足していませんR	0.05	−0.15	**0.71**
		問61. 私は、社会の中での自分の役割がわかります	−0.23	0.14	**0.68**
		問7. 私は、社会的に必要とされていると思います	−0.11	0.11	**0.65**
		問16. 私は、親として以外の自分自身に対して前向きではありませんR	−0.06	0.06	**0.64**
		問41. 私の生き方は、自分で納得のいくものだと思います	0.06	0.10	**0.63**
		問33. 私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいると思えませんR	0.16	−0.06	**0.55**
		問20. 私は、自分自身のことを信頼しています	−0.06	0.30	**0.54**
		問35. 私は、日々の生活をうまくやっていく自信がありませんR	0.26	0.00	**0.51**

主因子法・プロマックス因子 因子負荷量0.4以上の質問項目 n=859 KMO値=0.954 R逆転項目
累積寄与率 48.32%

表 5　育児期の親性構成概念　試作案と選定後

	カテゴリー	サブカテゴリー(試作案)	サブカテゴリー(選定後)
自己への認識	親役割の状態	親役割の満足感 育児への関心 親役割獲得の期待(選定後は削除) 育児能力・態度・欲求	親役割の満足感 育児への関心 育児態度 子どもとの関係
	親役割以外の状態	親として以外の自分への満足感 自己肯定・自己への欲求 社会との関係	親として以外の自分への満足感 自己肯定・自己への欲求 社会との関係
子どもへの認識	子どもへの認識	子どもへの愛着 子どもの様子の理解 子どもの成長・発達の理解 子どもとの関係	子どもへの愛着 子どもの様子の理解 子どもの成長・発達の理解 育児能力

変更になったサブカテゴリー

表6 対象者の属性　n=78（母親41名　父親37名）

		mean	SD	range
年齢		30.63	3.82	23-42
結婚期間(月)		27.13	20.31	6-90
妊娠週数		39.22	1.37	35-41
出生時の体重		2973.28	348.60	2166-3592
			%	
職業	有り	54	69.2	
	無し	24	30.8	
家族形態	核家族	66	84.6	
	拡大家族	10	12.8	
	無回答	2	2.7	
出産状況	経膣分娩	70	89.7	
	帝王切開	8	10.3	
児の性別	男	40	51.3	
	女	38	48.7	
立会出産	有り	59	75.6	
	無し	19	24.4	

出産状況・立会出産については、母親と同等の体験としてカウントした

表7　信頼性係数　Cronbach'α　n=78

	項目数	出産後	1ヶ月後	3ヶ月後	6ヶ月後	12ヶ月後
育児期の親性総得点	33	0.92	0.93	0.94	0.93	0.95
自己への認識	22	0.91	0.92	0.92	0.92	0.94
親役割の状態	13	0.88	0.89	0.88	0.88	0.90
親役割以外の状態	9	0.83	0.85	0.87	0.88	0.90
子どもへの認識	11	0.85	0.85	0.88	0.87	0.87
FAI 総得点	30	0.94	0.94	0.95	0.95	0.93
家族内コミュニケーション	6	0.82	0.82	0.79	0.82	0.79
家族システムの柔軟性	6	0.80	0.78	0.87	0.88	0.78
家族内ルール	6	0.71	0.73	0.68	0.62	0.63
家族に対する評価	6	0.82	0.87	0.88	0.87	0.83
家族の凝集性	6	0.90	0.91	0.89	0.89	0.87

Cronbach's　α<0.70

表8　育児期の親性　下位領域間の関連

	出産後	1ヶ月後	3ヶ月後	6ヶ月後	12ヶ月後	出産後	1ヶ月後	3ヶ月後	6ヶ月後	12ヶ月後
	自己への認識					子どもへの認識				
	親役割以外の状態									
自己への認識						0.49**	0.48**	0.54**	0.45**	0.55**
親役割の状態	0.67**	0.65**	0.74**	0.72**	0.78**	0.49**	0.48**	0.53**	0.48**	0.53**
親役割以外の状態						0.42**	0.41***	0.49**	0.40**	0.47**

Spesrman's ρ
**p<0.01

表9　育児期の親性　母親と父親の比較　（母親41名・父親37名）

		出産後		1ヶ月後		3ヶ月後		6ヶ月後		12ヶ月後	
育児期の親性総得点	母親	126.78±11.28	ns	127.11±11.34	ns	133.64±11.32	ns	133.82±12.40	ns	133.16±12.95	ns
	父親	123.83±14.73		126.55±14.10		131.53±15.40		131.81±14.05		133.45±15.85	
自己への認識	母親	90.96±8.79	ns	89.89±9.11	ns	92.83±7.86	ns	91.64±9.38	ns	90.66±10.84	ns
	父親	88.76±10.74		90.17±9.63		91.68±10.59		92.43±10.14		91.99±11.31	
親役割の状態	母親	56.19±5.44	ns	55.67±5.91	ns	57.80±4.59	ns	57.07±5.30	ns	56.47±6.34	ns
	父親	54.17±6.72		55.11±5.40		56.22±5.74		56.76±5.26		56.18±6.02	
親役割以外の状態	母親	34.89±4.13	ns	34.45±4.05	ns	35.13±3.98	ns	34.56±4.78	ns	34.07±5.01	ns
	父親	34.80±5.26		35.16±5.02		35.46±5.64		35.68±5.66		35.78±5.93	
子どもへの認識	母親	35.72±4.49	ns	37.26±4.26	ns	40.66±4.88	ns	42.19±4.78	ns	42.13±4.12	ns
	父親	34.80±5.58		36.38±6.03		39.49±6.25		39.73±5.55		41.12±5.85	

表10　育児期の親性の経時的変化

	育児期の親性総得点 mean±SD(range)	自己への認識 mean±SD(range)	親役割の状態 mean±SD(range)	親役割以外の状態 mean±SD(range)	子どもへの認識 mean±SD(range)
出産後	125.38±13.03(98-160)	89.92±9.76(69-109)	55.23±6.12(40-65)	34.85±4.67(22-44)	35.28±5.03(22-52)
1ヶ月後	126.87±12.64(100-165)	90.02±9.30(65-110)	55.41±5.65(39-65)	34.78±4.52(22-45)	36.86±5.16(23-55)
3ヶ月後	132.55±13.39(107-165)	92.28±9.21(73-110)	57.05±5.20(43-65)	35.29±4.81(21-45)	40.10±5.56(28-55)
6ヶ月後	132.87±13.16(104-165)	92.01±9.69(73-110)	56.92±5.25(46-65)	35.09±5.21(24-45)	41.03±5.27(26-55)
12ヶ月後	133.30±14.31(89-164)	91.29±11.01(54-110)	56.34±6.14(37-65)	34.88±5.50(17-45)	41.65±5.01(30-54)

*p<0.05　**p<0.01 ***p<0.001

表 11 育児期の親性に影響する要因 n=78

		n	出産後		n	1ヶ月後		n	3ヶ月後		n	6ヶ月後		n	12ヶ月後	
育児期の親性総得点	心身ともに快調	53	125.04±12.43		52	127.78±11.60		59	134.51±13.54		59	134.80±13.59	*	64	134.17±13.80	
	どこか不調	18	126.75±14.73		22	124.14±15.39		18	127.18±10.91		15	124.33±9.25		12	126.11±13.98	
	生活に不安なし	53	127.39±13.25	*	52	128.11±13.35		54	134.77±13.87	*	46	136.20±13.53	*	49	136.75±12.44	***
	生活に不安なり	17	119.41±10.62		23	123.57±11.19		23	128.18±10.68		26	126.62±11.59		27	125.89±14.31	
自己への認識	心身ともに快調	53	90.00±9.40		52	91.18±8.66		59	93.98±8.83	*	59	93.76±9.69	*	64	92.41±10.38	*
	どこか不調	18	90.45±10.84		22	86.77±10.59		18	87.56±8.40		15	84.47±7.07		12	83.75±11.42	
	生活に不安なし	53	91.68±9.49	*	53	91.11±9.66		54	94.15±9.18	*	46	94.76±9.78	*	49	93.91±9.73	*
	生活に不安なり	17	85.06±9.14		22	87.13±8.40		23	88.57±7.75		26	86.92±8.57		27	85.85±11.27	
親役割の状態	心身ともに快調	53	54.93±6.48		52	55.86±5.36		59	57.61±5.17		59	57.49±5.45	*	64	56.97±5.78	*
	どこか不調	18	56.50±5.65		22	54.18±6.57		18	55.72±4.85		15	54.20±4.13		12	52.25±6.80	
	生活に不安なし	53	56.31±6.02	*	52	55.78±6.01	*	54	57.87±5.41		46	57.80±5.70	*	49	57.55±6.03	**
	生活に不安なり	17	52.06±6.26		23	54.43±5.11		23	55.52±4.02		26	55.12±4.51		27	53.81±5.70	
親役割以外の状態	心身ともに快調	53	35.32±3.96		52	35.56±3.95	*	59	36.45±4.31	**	59	36.27±4.85	***	64	35.36±5.28	*
	どこか不調	18	33.88±5.80		22	32.59±5.23		18	31.83±4.67		15	30.27±4.54		12	31.50±5.33	
	生活に不安なし	53	35.60±4.41		52	35.57±4.25		54	36.36±4.52	*	46	36.96±4.71	***	49	36.24±4.56	**
	生活に不安なり	17	33.00±4.43		23	32.70±4.63		23	33.04±4.67		26	31.81±5.00		27	32.04±5.93	
子どもへの認識	心身ともに快調	53	34.94±4.81		52	36.64±4.74		59	40.56±5.81		59	41.26±5.54		64	41.63±5.00	
	どこか不調	18	35.83±5.82		22	37.36±6.44		18	38.83±4.64		15	39.87±4.85		12	40.72±4.21	
	生活に不安なし	53	35.45±5.69		52	37.03±5.31		54	40.65±5.81		46	41.73±5.11		49	42.29±4.95	*
	生活に不安なり	17	34.35±2.34		23	36.43±5.24		23	39.00±4.94		26	39.69±5.82		27	40.04±4.45	

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

表12　育児期の親性とFAI下位領域間の関連　n=78

FAI	育児期の親性									
	自己への認識（親役割の状態・親役割以外の状態）						子どもへの認識			
		1ヶ月後	3ヶ月後	6ヶ月後	12ヶ月後	出産後	1ヶ月後	3ヶ月後	6ヶ月後	12ヶ月後
家族内コミュニケーショ	0.39**	0.48**	0.48**	0.57**	0.62**	0.27*		0.48**	0.26*	0.38**
家族システムの柔軟性	0.38**	0.41**	0.46**	0.43**	0.51**	0.25*		0.41**		
家族内ルール	0.26*				0.31**					
家族に対する評価	0.45**	0.48**	0.56**	0.52**	0.62**	0.34**		0.45**	0.23*	0.24*
家族の凝集性	0.52**	0.52**	0.65**	0.64**	0.61**	0.38**		0.42**	0.29**	0.24*

Spesrman's ρ

*$p<0.05$　**$p<0.001$

資料１：調査関係書類

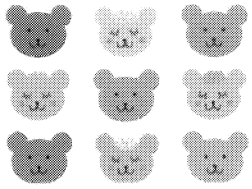
　親性と家族機能についてのアンケート

資料２：副論文１　別刷り

資料３：副論文２　別刷り

資料４：投稿論文　別刷り

ご出産後のお母様・お父様へ



研究協力のお願い

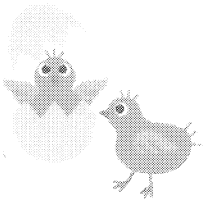
ご出産おめでとうございます　お疲れのところ大変恐縮ですが

私は、名古屋大学大学院医学系研究科 看護学専攻 健康発達看護学分野 博士課程後期2年 大橋幸美と申します。現在、親性の発達と家族機能について研究に取り組んでいます。親性とは、母親と父親に共通する、自分への思いや子どもに対する思い、親としての役割意識などのことで、現在子育て中のお母さんとお父さんが、日常生活の中でお子さんに対する思いと子育てについてどのように感じ、ご自身に対しての思いとご家族の方々との関係についてどのように感じておられるかについて調査を行い、今後の育児支援に役立てていきたいと考えています。

出産後1年間の、お気持ちの変化もお伺いしたいので、**今回以外にも1ヶ月後、3ヶ月後、6ヶ月後、1年後の計5回協力していただけると幸いです。**今回のみのご協力でも結構です。
調査内容については、ご夫婦であっても本人の同意なしに公開しません。得られた情報は本研究のみに使用します。
この研究の結果は、論文としてまとめ、匿名化したうえで学会等に発表することを予定しています。

① 質問用紙は、全部で7ページあります。
② 一つの質問についてあまり深く考え込まずに、現在の率直なお気持ちをお聞かせ下さい。
③ 質問に答えたくないものには無理にお答えいただかなくても結構です。
　また、参加承諾後に途中でやめることも自由です。
④ 本研究にご協力いただけなくても。診療や看護で不利益を受けることはありません。
⑤ ご記入が終えられましたら、ご夫婦お互いのプライバシー保護のため、個別の封筒（**小**）に入れていただき返信用封筒（**大**）（切手不要）に入れ、出来るだけ**1週間以内に郵便ポストにご投函下さい。**
　（多少遅れても、ご投函していただければ幸いです）

以上の内容をお読みいただいてご同意していただき、今回と1ヶ月後・3ヶ月後・6ヶ月後・1年後の継続的調査にご協力していただける場合は、アンケート用紙の最後のページに同意書がありますので、ご住所とお名前をご記入ください。**(この用紙は、同意書の欄にご署名後お手元に保管して下さい)**
今回のみの、研究ご協力の場合は、同意書の署名は結構です。
匿名化するため封筒にも差出人のお名前は記入しないで下さい。



調査内容に関する疑問やご質問は下記にいつでもお問い合わせ下さい。

《問い合わせ先》
（研究者）名古屋大学大学院医学系研究科　看護学専攻　健康発達看護学分野
博士課程後期課程　2年　大橋　幸美
（指導者）名古屋大学医学部保健学科　看護学専攻
教授　浅野　みどり　　電話 052-719-3157
メールアドレス　midoria@met.nagoya-u.ac.jp

同　意　書

研究者　大橋　幸美

私は、今回の「親性の発達と家族機能との関連」の研究にあたり、研究目的と方法について、これを了承し、今後の継続的調査に夫婦で協力することに同意します。　　平成19年　　月　　日

研究協力者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご出産後のアンケート

以下の質問にお答え下さい。あてはまるものに〇をつけ、ご記入をお願いします。

1)　あなたの年齢　（　　）歳

2)　現在の職業　　1．あり（産後休業中）　　2．なし

「1．あり」の場合　　1．常勤職員　2．パート・アルバイト等　3．自営業　4．その他（　　）

3)　差し支えなければ、最後に卒業した学校についてお答えください。

1．中学校　　2．高等学校　　3．短大/専門学校　　4．大学/大学院

4)ご結婚されてから（同居されてから）どのくらいですか？

（　　）年（　　）ヶ月

5)　妊娠・出産の状況についてお答えください。

(1) 妊娠中には何か問題がありましたか？

1．なし　　2．あり（どのような　　）

(2) 出産の状況をお答えください

1．経膣分娩（自然分娩）　2．帝王切開　　3．その他（　　）

(3) 妊娠週数とお子さんの生まれたときの体重と性別についてお聞かせ下さい

妊娠　　週　　日　　ご出産日　　月　　日

お子さんの出生時体重（　　）g　　男　・　女

(3) 出生時の異常について

1．なし　　2．あり（どのような　　）

(4) 生まれたときの子どもさんの状態はいかがでしたか？

1．異常なし　2．異常があった（どのような　　）

6)立ち会い分娩でしたか？　　1．はい　　2．いいえ

7)今まで(ご出産までに)、赤ちゃんを抱っこしたり、おむつを交換したりしたことがありますか？

1．何回もあった　　2．1～2 回程度あった　3．まったくなかった

8)　現在のあなたの精神状態や身体の調子はいかがですか？

1．心身ともに快調　2．身体の調子は良いが精神的に不調

3．精神的には良いが身体的に不調　4．心身ともに調子が悪い

9)　現在のお子さんの様子はいかがですか？

1．問題がない　2．問題がある（どのような　　）

10) 現在、子育てについて何か不安や心配事がありますか？

1．なし　　2．あり（どのような　　）

11) 現在、あなたの生活について（子育て以外）何か不安や心配事がありますか？

1．ない　　2．あり（どのような　　）

12) あなたは、「夫は仕事、妻は家事と育児に専念する方がよい」と思われますか？

1．非常にそう思う　2．まあそう思う　3．あまり思わない　4．まったく思わない

13) あなた自身は、どのように育てられたと感じられますか？

1．深い愛情をもって育てられた　　2．比較的愛情をもって育てられた

3.あまり愛情深く育てられなかった　　4．愛情を持って育てられなかった

14)現在、ご自宅で過ごされていますか？

1.はい　　2.いいえ（ご実家・パートナーのご実家・その他　　）

15) 現在、一番の精神的な支援者（サポーター）は、どなたですか？

（　　）

16) 現在の生活の中で、精神面以外の支援者（サポーター）はどなたですか？

（　　）

親性と家族機能についてのアンケート

（お父様用）

（　　）出産後　**ご出産日　月　　日**

（　　）１ヶ月後　　月　　日頃

（　　）３ヶ月後　　月　　日頃

（　　）６ヶ月後　　月　　日頃

（　　）１年後　　月　　日頃

《お問い合わせ先》
（研究者）名古屋大学大学院医学系研究科　看護学専攻　健康発達看護学分野
博士後期課程　２年　大橋　幸美
（指導者）名古屋大学医学部保健学科　看護学専攻
教授　浅野　みどり　　電話 052-719-3157
メールアドレス　midoria@met.nagoya-u.ac.jp

記入方法のご説明

① 質問用紙は、全部で７ページあります。

② 一つの質問についてあまり深く考え込まずに、現在の率直なお気持ちを
お聞かせ下さい。

③ 質問に答えたくないものには、無理にお答えいただかなくても結構です。
また、参加承諾後に途中でやめることも自由です。

④ 研究にご協力いただけなくても、診療や看護で不利益を受けることはありません。

⑤ 記入が終えられましたら、ご夫婦お互いのプライバシー保護のため、個別の封筒（**小**）
に入れていただき、ご夫婦の回答用紙を一緒に返信用封筒（**大**）（切手貼用済）に入れ、
出来るだけ**１週間以内**に郵便ポストにご投函下さい。

（多少遅れても、ご投函していただければ、幸いです）

ご協力よろしくお願いします

育児期の親性についてのアンケート

お子様に対するお気持ちとご自身に対するお気持ちをうかがいます

以下の質問内容について、あなたの現在の気持ちにどの程度あてはまりますか。
1. まったくそのとおり 2. そのとおり 3. どちらともいえない 4. 違う
5. まったく違う　のうち、　あてはまる数字ひとつに〇をつけてください。

　この調査は、「良い親」「悪い親」と評価するものではありません。
あまり深く考え込まずに、直感でお答えください。
もし、あなたの気持ちをよくあらわす答えがないときは、最も近い数字を選び、
〇をつけてください。

1 まったくそのとおり
2 そのとおり
3 どちらともいえない
4 違う
5 まったく違う

1. 私は、自分自身のことを信頼しています	1	2	3	4	5
2. 私は、子どもによく話しかけています	1	2	3	4	5
3. 私は、育児をすることに満足感を感じていません	1	2	3	4	5
4. 私は、子どもの様子がよくわかります	1	2	3	4	5
5. 私は、子どもとスキンシップがとれていません	1	2	3	4	5
6. 私は、社会の中での自分の役割がわかります	1	2	3	4	5
7. 私は、現在の子どもの発育がよく分かります	1	2	3	4	5
8. 私は、親としての充実感を感じていません	1	2	3	4	5
9. 私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいると思えません	1	2	3	4	5
10. 私は、子どもと関わる時間を充分にとりたいと思います	1	2	3	4	5
11. 私は、子どもに喜びを与えていると思います	1	2	3	4	5
12. 私は、子どもとコミュニケーションがとれています	1	2	3	4	5
13. 私は、子育てに充実感を感じていません	1	2	3	4	5
14. 私は、子どもの性格がわかります	1	2	3	4	5
15. 私は、子どものこれからの発育の様子を想像することができます	1	2	3	4	5
16. 私は、親として以外の自分は充実していると思えません	1	2	3	4	5

5まったく違う 4違う 3どちらともいえない 2そのとおり 1まったくそのとおり

17. 私は、育児に関心があります＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

18. 私は、日々の生活をうまくやっていく自信がありません＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

19. 私は、子どもの欲求がよく分かります＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

20. 私は、子どもを寝かしつけることがうまくできます＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

21. 私は、子どもと関わる時間を大事にしていません＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

22. 私は、親として以外の自分自身に対して前向きではありません＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

23. 私の生き方は、自分で納得のいくものだと思います＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

24. 私は、子どもとの関係に満足していません＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

25. 私は、子どもの食事(授乳)の世話がうまくできます＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

26. 私は、社会的に必要とされていると思います＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

27. 私は、親としてだけの自分をむなしいと思います＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

28. 私は、子どもの気持ちがわかりません＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

29. 私は、育児をすることに喜びを感じています＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

30. 子どもはいつも私がいやがることをします＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

31. 私は、親として以外の自分に満足していません＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

32. 私は、子どもの個性がわかります＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

33. 私は、子どもに信頼されていると思います＿＿＿＿ 1　2　3　4　5

父性意識尺度

この調査は、常日頃のお気持ちをうかがうものです。
ありのままのお答えをご記入下さいますよう、お願い申し上げます。

次の 1～12 に書いてあることは、あなた自身のお気持ちに
どの程度あてはまりますか。
（4.そのとおりである　3.どちらかといえばそうである　2.どちらかといえば違う　1..違う）
の 4 つのうち、一つに〇をつけて下さい

例　13）子どものためなら、たいていのことは我慢できる

そのとおりである　どちらかといえばそうである　どちらかといえば違う　違う

4　3　2　1

1）父親であることが好きである　4　3　2　1

2）育児にたずさわっている間に、世の中から取り残されていくように思う　4　3　2　1

3）父親になったことで人間的に成長できた　4　3　2　1

4）育児にたずさわっている間に、世の中からとり残されていくように思う　4　3　2　1

5）父親としてふるまっているときが一番自分らしいと思う　4　3　2　1

6）自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる　4　3　2　1

7）父親であることに生きがいを感じている　4　3　2　1

8）父親であるために自分の行動がかなり制限されている　4　3　2　1

9）自分は父親として不適格なのではないだろうか　4　3　2　1

10）子どもを産まないほうが良かった　4　3　2　1

11）父親であることに充実感を感じる　4　3　2　1

12）父親になったことで気持ちが安定して落ち着いた　4　3　2　1

家族機能に関する質問紙

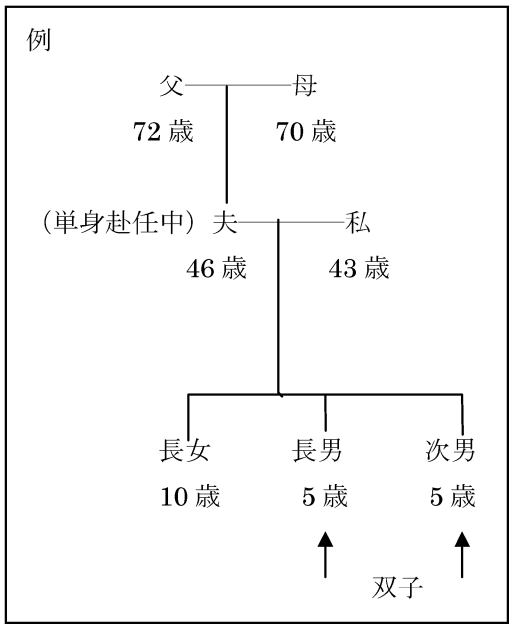
FAI(Family Assessment Inventory)

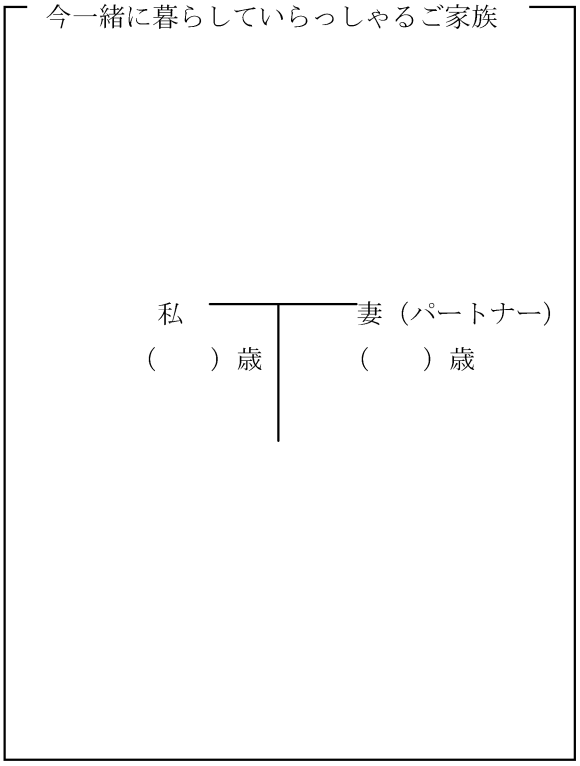
この調査は、あなたが家族についてふだんどう考えていらっしゃるかを調べるものです。
この調査の結果からは、「良い家族」、「悪い家族」という家族診断は出てきません。
この調査の目的は、あなたの家族のどこにいい点があって、また、どこを改善するともっと
あなたにとってふさわしい家族になるかという、家族の成長に必要な情報を得ることです。
どうぞ、率直にお答えくださいますようにお願いします。

以下の内容についてご記入下さい

・私の家族は（　　）人家族です。

・　あなたが、いま一緒に住んでいらっしゃるご家族の構成を例のようにご記入下さい。





これから、あなたのご家族についていくつかお聞きします。
下にかかげてあります項目に、あなたのご家族がどれだけ
あてはまるかを例にならってお答えください。お答えいただく
時には、ご家族全体を思いうかべて、あまり深く考えこまずに
お答えください。

〈例〉100.私の家族は人づきあいがよい。

全くあてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない	だいたいあてはまる	あてはまる	非常によくあてはまる
			○		

	全くあてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない	だいたいあてはまる	あてはまる	非常によくあてはまる
	1	2	3	4	5	6
1.私の家では、みんなが自分の考えをはっきりと口に出して言いやすい。	1	2	3	4	5	6
2.家族の問題をいったんは解決しても、すぐまた同じ状態に戻ってしまうことが多い。	1	2	3	4	5	6
3.家族で決めたことはみんなで守る。	1	2	3	4	5	6
4.私の家族は暖かく明るい感じがする。	1	2	3	4	5	6
5.私の家族はみんなそれぞれに、てんでばらばらな方である。	1	2	3	4	5	6
6.私の家では、お互いに気持ちをぶつけることができない。	1	2	3	4	5	6
7.いったん家族の者それぞれが果たすべき役割が決まると後でそれを変えるのは難しい。	1	2	3	4	5	6
8.私の家には、きまりがあるのかどうかはっきりしない。	1	2	3	4	5	6
9.私の家族は私が望む雰囲気をほぼいつも備えていた。	1	2	3	4	5	6
10.私の家族には連帯感がある。	1	2	3	4	5	6
11.家の中では何でも話ができる。	1	2	3	4	5	6
12.家にいると何となく重苦しい気分になる。	1	2	3	4	5	6
13.私の家では、お互いの役割分担がはっきりしている。	1	2	3	4	5	6
14.家族は私の言っている意味をほぼ正確にとらえる。	1	2	3	4	5	6
15.私の家族はお互いにとてもうまくいっていると思う。	1	2	3	4	5	6

	全くあてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない	だいたいあてはまる	あてはまる	非常によくあてはまる
16.私の家では、お互いに自分の好きなことができる。	1	2	3	4	5	6
17.私の家では、いったんこうと決めたことを変えるのは難しい。	1	2	3	4	5	6
18.時間をきちんと守ることは、私の家では重視されている。	1	2	3	4	5	6
19.私の家族は、私が心のよりどころにできる場所である。	1	2	3	4	5	6
20.私と家族の気持ちはよく合っている。	1	2	3	4	5	6
21.私の家族は自分の言い分をあまり口に出さない。	1	2	3	4	5	6
22.私の家では、誰か一人が、ほとんどのことを決めている。	1	2	3	4	5	6
23.私の家には、しっかりとしたきまりはない。	1	2	3	4	5	6
24.私は、問題が起こったときには、いつも家族を頼りにする。	1	2	3	4	5	6
25. 私の家族は、お互いに充分な関心を持って接している。	1	2	3	4	5	6
26. 自分のやろうとしていることが、家族に妨げられている感じがすることがある。	1	2	3	4	5	6
27. 私の家では、話し合いをしてもなかなかうまくまとまらないことが多い。	1	2	3	4	5	6
28. 私の家族の中では、きまりを守ることがとても大切にされている。	1	2	3	4	5	6
29. 家族は私の気持ちをよく理解してくれている。	1	2	3	4	5	6
30. 家族の者は私の苦労をわかっていて、励ましてくれる。	1	2	3	4	5	6

親になることについて、ご自分ではどのように受けとめて(感じて)いらっしゃいますか？
どんなことでも結構ですのでお聞かせ下さい

ご協力ありがとうございました

ご協力ありがとうございました

本研究では、出産後１年間の、お気持ちの変化もお伺いしたいので、今回以外にも今後１ヶ月後、３ヶ月後、６ヶ月後、１年後の計４回御協力していただけると幸いです。質問は同じ内容です。

もし、ご協力していただけるようでしたら、下記の同意書に、ご住所とお名前をご記入下さい。次回のアンケート用紙をお届けしたいと思っています。

どうぞよろしくお願いします。

同意書

研究者　　大橋　　幸美

私は、今回の「親性と家族機能について」の研究にあたり、研究目的と方法について、これを了承し、今後の１年間の継続的調査に夫婦で協力することに同意します

平成 19 年　　月　　日

〒＿＿＿＿＿＿

住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

研究協力者氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

回答後のアンケート用紙は、ご夫婦のプライバシー保護のため、個別の封筒(**小**)に入れていただき、パートナーの方のアンケート用紙とご一緒に返信用封筒(**大**)（切手貼用済）に入れて郵便で送り返して下さい。

最後まで答えていただき

ありがとうございました